

ばもす！おおまち

—地域文化コーディネーター派遣モデル事業報告書—



目次

はじめに	3	成果発表を終えて 講師&受講者のコメント	48
PART1 イントロダクション		成果発表 当日アンケート結果	52
なぜ大町市で「文化」なのか？（牛越市長インタビュー）	4	PART3 大町市文化資源活用ビジョン策定	
新しい関係性の中にこそある可能性に向かって（荒井教育長インタビュー）	5	「ビジョン（計画）」は文化をイベントで終わらせないための約束	55
地域文化コーディネーター派遣モデル事業のあゆみ	6	ビジョン策定の起点 大町市への小林ゼミによるプレゼンテーション	56
「文化で大町を豊かに」というプロジェクトが目指すもの	8	第1回大町市文化資源活用ビジョン策定委員会/委員インタビュー	58
ポスターセッション発表にみる小林ゼミの大町市へのアプローチ	11	第1回市民文化会議	62
2014年度 大町プロジェクト本格始動へ！	18	第2回市民文化会議	64
地域文化コーディネーター派遣モデル事業とは？	19	第3回市民文化会議	66
「大町冬期芸術大学」の開講と	20	アンケートにみる大町市の文化における課題	68
「大町市文化資源活用ビジョン」策定に向けた準備		大町市の文化行政 はじまりの第一歩	74
PART2 大町冬期芸術大学		行政と市民協働による文化資源活用ビジョン策定へ	
「大町冬期芸術大学」が目指したもの	23	大町市文化資源活用ビジョン 試案	76
大町冬期芸術大学 ディレクションの軌跡	24	大町市で「つながる」ってどういうこと？	79
大町冬期芸術大学チラシ	26	大町市での取り組みをより多くの人に	
第1回 大町冬期芸術大学 開講！！	27	(1) 展示「ばもす！おおまち—文化資源活用ビジョンの策定に向けて—」	80
教えてくれたのはこんな人たち	28	(2) 小林ゼミによる広報活動	82
企画プロデュースコース	30	大町市 文化と行政の今までとこれから—大町市職員コメント—	84
パフォーマンスコース	32	おわりに	86
ファッションコース	34	小林ゼミのあしあと	88
空間美術コース	36	PART4 資料編	
4つのコース受講者による全体企画会議	38	大町市情報	90
リハーサル報告 最後の演出が決まった夜	40	広報誌 「ばもす！おおまち」誌面紹介	91
第一期生 成果発表パフォーマンス 当日配布プログラム	42	新聞掲載	98
第一期生 成果発表パフォーマンス Yes, I'm dapping!	44	参考文献リスト	99

はじめに

一般財団法人地域創造から、地域文化コーディネーターとして長野県大町市に関わってほしいという依頼があったのは、2011年度だったかと思います。記憶をたどると、おそらく2011年度の地域創造大賞の授賞式の席で、前理事長の林省吾さんからお話をいただいたのだと思います。地域文化コーディネーター自体は私個人に依頼されたものですが、この活動を私は自分の所属する研究専攻のゼミナール（「文化経営学演習」）に拡大して行ってきました。その理由は、私のゼミナールが地方自治体における文化政策の制度設計と実践を考えるものであり、私にしても学生にしても具体的な自治体に関わりながら理論と実践を経験できる重要な機会であること、そしてこの事業はおそらく文化政策実践のための準備段階（設計段階）から関わることのできる絶好の機会であること、それを実践していく自治体の現場側はさまざまな業務を日々抱えていることから人員体制的に行政職員の全面的な実働は難しいであろうということがあげられます。

この事業は、これまでの地域文化コーディネーターがそうであったように、ただイベントを開催して地域を一時的に盛り上げればよいと考えているわけではなく、「文化でまちづくり」をしていく上での構造的な課題に取り組むことが要請されている事業だと考えています。すでにある構造が自明であり、課題解決のために意識下の行動変革を促すものになるのだとすれば（そうなるはずなのですが）、それを見えるようにすることや自覚することが重要です。そして、それを解決して具体的な方向へと動かすための労力は並大抵ではなく、時間もかかります。それゆえに私自身本気でこの事業に関わることに一種の躊躇を覚えながらも、「文化でまちづくり」をすることの可能性を忍耐強く支援をする地域創造の活動に共感しつつ、この事業の重要性を支持する立場にあったということが出来ます。

2012年度と2013年度の2年間は地域創造から派遣をしていただき、3年目の2014年度は大町市における事業展開の費用は地域創造から、そして私個人の派遣依頼は大町市からいただいて関与を続けてきました。この報告書は、この3年間の大町市における地域文化コーディネーター事業についての、私個人とゼミナール側からの記録になります。

2015年3月15日

東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授

小林 真理

なぜ大町市で「文化」なのか？－牛越徹市長インタビュー－



牛越 徹（うしこし とおる）

1950年生まれ、大町市出身。早稲田大学政治経済学部を卒業後、長野県の職員として長野オリンピックや財政改革を経験。生活文化課長や土木部監理課長を経て、2006年大町市長に就任、現在に至る。

地域文化コーディネーター派遣モデル事業をなぜ受け入れようと思われたのでしょうか？

ー地域創造理事長だった林省吾さんがフランスのナント市の事例から「地域は文化で食べていける」という提案をされており、目からうろこが落ちる思いでした。私自身、文化には興味はあるが、文化というのは個人的な趣味であって、地域に関わるものとは考えていなかったからです。とはいえ、文化だけに頼ることはできないけれども、柱になるだろうと直感していました。2006年に大町市長となって、文化関連のさまざまな事業に取り組んできた中で、行政そのものの役割についてもの足りないと思うことが出てきました。その頃に小林真理准教授と出会い、事業の受け入れを決定しました。

この事業に期待したのはどんなことでしょうか？

ー行政と市民、両方の人を育てていく、文化を担う人材を育てるという発想に期待しました。

事業の一環として実施した2012年度の若手職員によるワークショップは、職員たちが担当している職務を越えて交流し、大いに刺激を与え合い感性に訴えることになったと思っています。彼らの活動は市民によるほかの催しも交わることで、「信濃大町 2014 食とアートの廻廊」や、若者が大町市の未来を考え

るマチサラの「youth サミット」など、行政・市民の垣根を越えた動きを生み出しました。職員が大きく成長したこと、そして市民が共感してくれたことが大きな成果だったと思います。

また、「協働」と銘打っても、それができる分野とできない分野があるとしたら、「文化」においては「協働」が間違いなく可能だということもよくわかりました。実際、大町冬期芸術大学のように「文化」をテーマにした事業においては、普段行政に関わる活動に参加しないような市民―IターンやUターンの方々、行政とは距離をとっていた方々も参加してくださったので感動しました。行政は、今こそコーディネーターとして一歩引いた立場で、地域の求めていることに加わっていけると考えています。

大町市と文化施策についてどのようにお考えですか？

ー2014年6月の市長選挙では公約に「文化、芸術を重点施策にする」と加え、市長3期目の役目をいただきましたので、「2015年は大町市の文化芸術元年」と公言し、その実現に向けて動いています。大町市は小さい自治体だからこそ、継続の意思や努力に共感してもらいやすいと考えています。担当者のやる気によってほかのメンバーも巻き込んでいけるのが強みです。そして、大町市では市民の危機感が強いことも大切な要素です。今、大町市で進めている文化行政の重点化は地域再生の先進事例になりうると思っています。

10年後、50年後の大町市の姿はどのようなものであってほしいと思いますか？

ー50年先はイメージするには遠いですね。しかし、50年前といえば、大町市が最も栄えた時代です。かつて女工さんたちが大勢暮らしていた名残の洋服店や菓子屋などが今もたくさん残っています。次の50年は、経済的な生活余剰がないと文化が栄えないということではなく、地域の力をしっかり磨き上げていきたいですね。

新しい関係性の中にこそある可能性に向かって－荒井今朝一教育長インタビュー－



荒井 今朝一（あらい けさいち）

1951年生まれ、大町市出身。信州大学理学部を卒業後、大町市職員としてライチョウ飼育や大町市史の編さん、国営アルプスあづみの公園の建設に携わり、産業建設部長、民生部長を経て、2009年大町市教育長に就任、現在に至る。

「大町冬期芸術大学」が始まってどのように思われましたか？

ー講師の伊藤キムさんによるプレワークショップで自分もコンテンポラリーダンスを体験しました。地域の文化というものはクラシックなものという固定観念がありましたが、そういった地域潜在的・伝統的なものと、先取りの文化芸術とをつなぐという発想を体感した日でした。とても開放感を感じました。さらにそのワークショップに参加した人たちもよかったです。元々地元にいる人だけでなくIターンやUターンの方々などいろいろな市民の方々が集まっていて、なかなかいい機会だと思いました。新しい時代の地域の在り方を感じ「これはおもしろいのではないか」と思い始めました。そしてどれだけいろいろな人が関わってくれるかに大町冬期芸術大学の意味はかかっていると考えました。何年か続けていろいろな人が集まることで、地域を垣根のないような状態にしていきたいと思っています。

今まで文化を振興するにあたり何が問題だと思っていりましたか？

ー大町の文化の問題は今まで二通りの在り方しかなかったことにあると思います。一つは中央のいいものをもってきて上演して観るだけの「受け身の仕組み」、もう一つは同好会や仲間内だけで発表したり観たりしている「仲間だけの仕組み」。しかし「大町冬期芸術大学」の特徴は、「先端的な要素をもつ文化芸術」と「自

分が参加すること」が重なって接点をもったことがあげられます。大変だけれども今までになかったことで、大変だからこそおもしろく、新しい関係性にこそある可能性があるのではないかと考えました。

文化資源を活用するということ、どのようにお考えでしょうか？

ーとても大変だとは思いますが、自分が思っていた文化の枠よりも、もっと世代や分野や空間の広がりがあるのが「文化資源」であり、ある意味無限とも言えるので。文化資源の活用につながる大町冬期芸術大学の開講を決意するのは大変でした。けれどもスタートしたからには、世代や分野や空間の広がりをもった活動にしていきたいと思っています。

文化を振興するにあたって、行政の役割をどのようにお考えでしょうか？

ー「条件を整える」「資金対応」「仕組みづくり」であり、あくまでも主役は「それをやる人」つまりは「市民」です。そのような行政の役割を明確にするために大町市は2015年の4月には文化会館を拠点とした芸術文化振興係を設置します。

10年後、50年後の大町市の姿は、どのようなものであってほしいと思いますか？

ー10年後は残念ながら日本全体の人口減少に伴い、人口は減っているでしょう。そういった中で、排他的ではなく、世代・分野、空間に関係なく一つのつながりがあるような地域社会になってほしい。「絆」といっても悪いしがらみ的なものではなく、いい意味でのつながりによって結ばれた地域になってほしいですね。「具体的な行動の中でお互いを認め合う」ことがいい方向性を生むと思っています。

地域文化コーディネーター派遣モデル事業のあゆみ

2012 年度

- 4月 一般財団法人地域創造より小林真理准教授が「地域文化コーディネーター」を依頼され、小林ゼミと大町市との協力関係がスタート
- 5月1日 小林准教授大町市訪問。各文化施設等見学。
- 5月～ ゼミにて大町市の基本情報調査スタート。
- 6月25日～26日 小林准教授大町市訪問。各文化施設・文化財見学、文化会館館長と懇談会、市職員との懇談会。
- 9月7日～ 若手職員懇談会の開催をスタート。
- 9月27日～28日 小林准教授大町市訪問。市職員との懇談会、小林准教授セミナー（市幹部職員、若手職員、市民団体代表向け）開催、若手職員と市民活動団体代表との懇談会、原始感覚美術祭実行委員メンバーと懇談、文化施設見学。

2013 年度

- 4月～ J・ジェイコブズ『発展する地域 衰退する地域』の講読、国内外の地域活性化に関する事例調査スタート。
- 5月～9月 ゼミ生有志による原始感覚美術祭の運営補助。
- 9月30日～10月1日 ゼミ生大町市訪問。小林准教授による市職員向けセミナー（テーマ「文化とまちづくり～なぜ文化に注目してきたか～」）。若手職員との懇談会。文化施設見学。

2014 年度

- 4月21日 小林准教授大町市訪問。山岳博物館リニューアル見学、大町市地域文化コーディネーター事業会議にて2014年度事業の検討開始。
- 4月～ 市職員からの提案をもとに、ゼミ内で地域文化コーディネーター事業の具体的な協議。
- 8月1日～3日 ゼミ生大町市訪問。文化施設等見学。
- 9月19日 小林准教授大町市訪問。大町市地域文化コーディネーター派遣事業会議にて①大町市文化資源活用ビジョンの策定②大町冬期芸術大学の開講に向けた具体案がまとまる。

- 12月17日～18日 ゼミ生の初大町市訪問。学生発表「学生から見た大町市」。若手職員ワークショップ（テーマ「大町の文化資源」）。文化施設見学。
- 3月9日～10日 日本文化政策学会第6回年次研究大会若手研究者ポスターセッションに参加。
- 3月12日～13日 ゼミ生大町市訪問。若手職員発表会と市民フォーラムの運営補佐。学会発表用ポスターを用いて、牛越徹市長へ報告（テーマ「学生が考える大町の課題と解決案について」）。
- 11月30日～12月1日 日本文化政策学会第7回年次研究大会の若手研究者ポスターセッションに参加。
- 1月～ 「野外博物館通信」の資料分析
- 3月11日～13日 ゼミ生大町市訪問。牛越市長、幹部職員に対しプレゼンテーション。

- 10月～ ゼミ内で「大町市文化資源活用ビジョン」と「大町冬期芸術大学」の事業内容について確認。記録係、広報係、計画事業係、大町冬期芸術大学係に分かれて活動開始。
- 10月22日 ゼミにて大町冬期芸術大学講師の伊藤キム氏による講義。同じく講師・川口知美氏とも顔合わせ。
- 1月23日～24日 第3回市民文化会議（ゼミ生による運営補佐）。
- 11月5日 ゼミにて第1回公開研究会開催。 2月13日～21日 大町冬期芸術大学成果発表会リハーサル（ゼミ生による運営補佐）。
- 11月21日～22日 大町冬期芸術大学開講式。 2月22日 大町冬期芸術大学成果発表会（ゼミ生による運営補佐）。第1回市民文化会議、第1回策定委員会開催。（ゼミ生による運営補佐）
- 3月16日 市民文化会議特別版（仮）、第2回策定委員会実施（ゼミ生による運営補佐）。
- 11月26日 ゼミにて第2回公開研究会開催。 3月16日～27日 市役所にてゼミ生による展示開催。
- 12月6日～7日 日本文化政策学会第8回年次研究大会の若手研究者ポスターセッションに参加。
- 12月18日～19日 第2回市民文化会議（ゼミ生による運営補佐）、ゼミ生による策定委員インタビュー。
- 12月21日～24日 大町冬期芸術大学をゼミ生が見学。



係がそうでした。大町市に限らず多くの自治体は、国の補助事業を地域に適切なものかどうかを国に提示されてから考えているところが多く、それはアイディアの一つかもしれませんが、熟考しなければ自らの主体的、創造的な営みとはいえません。それゆえに責任もとりにくい、うまくいかない場合は誰かのせいにすればよいということになりがちです。自らの描くビジョンを策定して、その目標のために国と必要に応じて連携ができるかを検討しないと、地域の文化が壊れてしまう危険性もあります。そういった理由から文化振興のためのビジョンづくりは不可欠です。

しかし、多くの地方自治体では、文化についてはこれまでに教育委員会や生涯学習などの領域で個人の自主的な学びという視点から支援を行っていることから、それほどまでに緊急性をもって受けとめられておらず、文化芸術を振興していくための条例や計画を策定している地方自治体は、日本全国を見わたしても多いとはいえません。多くのところでは、それなりにサービスを提供してい

ます。第一には、大町市役所の文化振興の方針とやり方に方向性をもたせること、第二に、その運用にあたって重要な役割を担うことを想定している「市民」に知識と方法を身につけてもらうこと、そして第三に、これら全体を運用していく行政職員に知識と方法を身につけてもらうことを目標に考えました。これら3つの目標を達成するために、「大町市文化資源活用ビジョン」の策定と、「大町冬期芸術大学」の実施と運営を通じて実践していくことを設計しました。ここでは前者の意図を説明します。

継続的な文化振興のための仕組み

地域の文化振興については、2001年に文化芸術振興基本法という法律が制定され、文化芸術を振興することは地方自治体の責務になりました。第4条では、文化芸術の振興に関して、地方自治体は「国との連携を図りつつ、自主的かつ主体的に、その地域の特性に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する」と定められています。この文で重要なのは、「自主的、主体的に」という部分と、「地域の特性に応じた施策」というところです。地方自治体自らがイニシアティブをとらないと、単純に国の補助事業に踊らされてしまうのです。これまでのすべての国の補助事業と地方自治体の関

るのは、その地域に住んでいる「市民」以外にありえないと思っています。ここで私が「」（カッコ）つきの「市民」と書いているのにはわけがあります。大町市に住んでいる人は、すべて（大町）市民です。でもすべての市民が、大町市全体の発展や振興を考えているわけではありません。むしろそのような人たちは少ないのではないのでしょうか。市民といえば、かつては行政にもの申す人という意味が強かった時代もありますが、現代においては公共の概念が広がり、「新しい公共」の担い手として意識されることが多くなりました。今や「市民」は単なる政治的なスタンスを主張するのではなく、また自己利益をはかるために利益誘導をするのではなく、地域の共通の課題を解決することに積極的に関わり、責任を果たそうとしている人たちです。日本の他の地域の例は、文化の分野でそのような活動をしている人たちを積極的にサポートすることによって、地域が変容していくきっかけになっていったことを示しています。

「市民」と行政の役割の再考

さて、それをこの大町市でどのように行えばよいか。私自身の専門は、文化政策をどのように制度設計をし、どのように運用していくのかということですから、この観点から取り組む必要があり

小林 真理

いて重要なエネルギーを供給してきた黒部ダムを知らない人はいない。何がこの地域を「へえだめせ」と言わせる地域にってしまったのか、誰が言っているのかということを考えさせられるようになりました。おそらくこのような後ろ向きの発言や傾向は、せいぜい50年くらいの間に生まれたものであるとしたら、新しい体験を生み出せば50年くらいの間に前向き志向に変えられるのではないかとさえ思うようになりました。

「市民」との出会い

そしてそのプロジェクトの中心に「文化」を据えることは、それほど奇をてらったことではない、前述したように消費ということにとらわれなければむしろこの地で育まれている文化的土壌を掘り起こすことが適切な地域である気がしてきました。さらにその思いを後押しするようになったのは、この地域の自然の豊かさ、たどってきた歴史も含めて地域の魅力を、これまでのやり方に拘泥することなく改めて自分たちの視点からとらえ返し、積極的な地域愛へと変えていこうと取り組んでいる地域の「市民」の人たちと出会えたからです。私は、地域を持続可能な地域に変えることができ

域に住み続けられないのではない、この地域特有の文化（考え方・風習・習慣・ものの言い方、行為）があるように思えてきました。

大町市の文化

そういう傾向について一度は、東西北を簡単には越えられない山に囲まれ、地区によっては雪深いこの地域の人たちの独自の傾向（あるいはDNA）なのではないかと思うに至りました。ところが、いろいろと調べてみると、それがマイナスに作用するどころか、市民の力でつくりあげた山岳博物館があり、日本で最初にアルミの精錬に成功した企業があり、100年近く長野県の教育関係者の努力で続いている学びの殿堂である信濃木崎夏期大学があり、豊かでありながらも厳しい自然に触発された芸術家たちの活動が活発に行われているなど、この地域には元々新しいことに挑戦し、受容しようとする、自主的で創造性あふれる精神が生まれる、あるいはそういう人たちを惹きつける土壌がある。さらに美しい北アルプスの玄関口であることから、山岳関係者で大町市のことを知らない人はいないし、悪く言う人もいない。また大町市は知らなくても、日本の高度経済成長にお

「文化で大町を豊かに」というプロジェクトが目指すもの

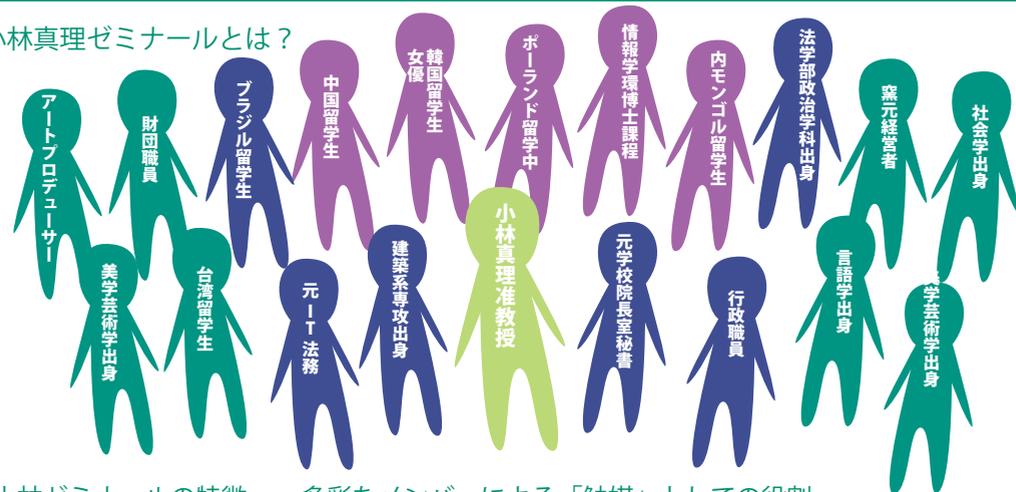
大町市での印象

私自身が大町市に対して最初に抱いた印象は、「どこにでもある日本の地方の自治体」という印象でした。それは今でも変わりません。日本全国の共通の問題である少子高齢化による人口減少、製造業の撤退による雇用の減少と若者の流出、それに伴う商店街のシャッター化、医師の集まらない地方公立病院といった問題を抱えながら、地域振興に功を奏するためのあらゆる取り組みはすべて行い、国のさまざまな補助事業を活用してなんとか振興を大町市は図ってきました。地理的には県庁所在地と県内第二の都市の中間に位置し、歴史的には交通の要所となりながらも、現代においては交通の便がよいとはいえ交通網の整備は依然として地域振興の重要な課題となっています。そのこと自体は残念ながら日本全国珍しいことではありません。ただし、この大町市で特に私が印象づけられたのは、地域や、地域の歴史、試行錯誤した取り組みに対して誇りや愛着を感じさせない後ろ向きの言葉の数々が聞かれたことでした。日本人一般が身内を褒めない傾向が強いことを考慮に入れたとしても、それでもこの3年間で聞かれたこれらの言葉の数々は、「何もない」からこの地

ると意識があるか、あるいは文化や芸術にそれほど価値を見いだしておらず、かけている予算も少ないことから行政内部の時々の判断で施策が展開されている状況にあります。したがって、意欲的な職員が文化振興のセクションに配属されるとその地域での文化振興が進むが、その人が異動してしまうと一挙に縮小してしまうということが起こりがちな領域です。人が変わると事業が停滞してしまうことは首長の変更でも同じことが起きます。

このことは、自治体で文化振興が取り組まれてからすでに30年以上が経過していますが、全国的な問題として課題視されてきました。文化が変容するには時間がかかりますので、継続的に文化振興をしていくための仕組みが不可欠です。それが条例、ビジョン、計画というものです。そこで大町市と協議をして今回は文化資源を活用していく文化振興を行うための「ビジョン」を策定することになりました。そして「ビジョン」を活用できる人材をこの地域に生み出す仕組みも必要です。それが「大町冬期芸術大学」となりました。二つの事業は、車の両輪として機能するものであり、どちらも不可欠だと考え2014年度の始動に至りました。

小林真理ゼミナールとは？



小林ゼミナールの特徴 —多彩なメンバーによる「触媒」としての役割—

小林ゼミナール（以下「小林ゼミ」）は「文化で地域を豊かにする」ことを目指して日々活動していますが、それはアートイベントの開催やアーティストの派遣といった関わり方とは異なります。「文化政策」の研究を基礎に、地域における文化と人との関係をよりよいものとするため、調査・報告・ワークショップ・成果発表等を通じて、その地域にもっともふさわしい在り方を検討しています。ゼミ内外での徹底した議論と現場主義で、地域の「こうなったらいいな」という環境整備に関わっています。

全国的な人口減少や少子高齢化の中で、各地域の掲げる理想は漠然としており、根源的な問題を抽出し、解決へのシナリオを描いていくことはかなりの難題です。私たちは、これを主導するのは地域の外の人間ではなく、あくまで地域に住む人々であることが望ましいと考えています。小林ゼミでは、そのプロセスにおいて、情報提供や交流機会の創出により、地域の内外の人々を刺激する「触媒」のような役割を担おうとしています。多様な背景や能力をもったメンバーが、適材適所で協力・分担しながら、日々全力で地域の課題に向かっています。

ポスターセッション発表にみる小林ゼミの大町市へのアプローチ

小林ゼミでは、日本文化政策学会の年次研究大会における「若手ポスターセッション」に毎年参加し、ゼミでの活動を報告しています。2012年度から大町市に関する調査や分析を中心にポスターをまとめてきました。

まだよくわからない大町市について調査し、分析を試みた2012年度、大町市の行政や市民の方々との交流が始まり、大町市の文化資源について考えた2013年度、具体的な事業が始まり、その中での小林ゼミの役割と大町市の関係を再考した2014年度の発表と、この3年間のポスターセッションの内容はその年度ごとの小林ゼミの大町市での活動のエッセンスが表現されています。

ポスター制作過程における討議から生まれたキーワードは非常に大切なもので、ゼミ内での共通認識を形成し、その後のゼミ活動を方針づけていくものでした。その成果は年度ごとに積み重なり、2014年度の「大町冬期芸術大学」の開講、「大町市文化資源活用ビジョン」の策定へとつながっていったことがこの3年間のポスターセッションの足取りから読み取れます。



2012 年度ポスターセッション「文化のまちづくりのための調査・方法論への一考察」解説



日本文化政策学会 第6回年次研究大会

日時：2013年3月9日（土）、10日（日）

場所：鳥取大学



2012年度は、牛越徹市長があげた大町市の課題、「定住の促進／産業の確保／安心・安全の確保」を出発点に、小林ゼミでは課題解決の糸口を探るために調査を始めました。2012年前半、ゼミ生は大町市を詳しく調べる大町班、長野県から見た大町市像を考える長野班、そして大町市に応用可能な先事例を調べる事例班の3班に分かれて調査を行いました。

市長が考える課題に加え、市ではあらゆる取り組みをすでに行っており、「市民には主体的な文化のまちづくりを求めたい」という行政の方針に対し、ゼミの調査では多様で活発な市民活動が観察されたことから、「市民は既に主体的であり、行政と市民の意志疎通が充分でないことが問題なのではないか」という問題意識を抱くようになりました。

長野県単位で見ると慢性的な転出超過や観光産業の衰退などが見受けられ、市長があげた課題は大町市固有の問題ではなく、地方の小都市が抱える共通の問題であることが明らかとなりました。ゼミ生は「他に考えるべき課題があるのではないか」、また「小林ゼミだからこそ出来ることとは何か」と改めて考えました。

第一回大町市訪問

そのような中、文化で大町市の課題を解決するためには、単に新たな文化イベントを導入するのではなく、まず行政側こそが主体的に動ける体制を整える必要があるという視点がゼミ内で共有されました。

事例分析と提案

国内外の先進事例を分析した結果、定住促進と雇用創出に対して文化のみで抜本的な解決方法を提案するのは難しいことがわかりました。それを踏まえ、ゼミ生の考える「大町への提案」13案のまとめから「行政と市民の距離感を解消するため、小林ゼミのコーディネート力を活かし、話し合いの場を設ける」方向性が示されました。



第二回大町市訪問

小林先生による第2回目の大町市訪問の際には職員と市民向けのセミナーが行われました。行政と市民の間の適切な関係構築がされておらず、両者が価値を共有していないという危機感に乏しいという印象を受けました。この訪問を踏まえて、問題点の再整理を行いました。行政側が求める「主体的に行動する市民像」と実際の「多彩な市民活動」との間のズレと、さらには大町市の人々が語る「地域に対するマイナスなイメージ」とゼミ生の調査で明らかになった「大町市の豊かな可能性」の間のズレ、これらのズレを解消することで、「文化のまちづくり」に向けて意識を高めていくことができるのではないかと考えました。

まとめ

「文化のまちづくり」とは、文化を単に観光資源として利用するだけではなく、文化を通してまちの構成員が自らの文化の大事さを再発見し、それをもとに自分たちに合ったまちをつくるプロセスのことを指します。「定住促進」「産業の確保」等の日本の地方都市に共通した課題を、文化を通じて解決することは短期間には極めて困難です。しかし、豊かさは経済的な指標のみで測れるものではありません。文化や芸術は、そのまちにとっての「豊かさ」の価値観を問い直す時、新たな視点や発想を提示することができます。

※ 2012年12月に「若手職員による研究中間報告会」に合わせて、小林ゼミ生は大町市を初めて訪れました。そこで「学生から見た大町市」をテーマに、ゼミ生が考える大町市のよさと課題を提示しました。

2013 年度ポスターセッション「地域の文化が文化資源に変わるとき」解説



日本文化政策学会 第7回年次研究大会

日時：2013年11月30日（土）、12月1日（日）

場所：青山学院女子短期大学 北校舎

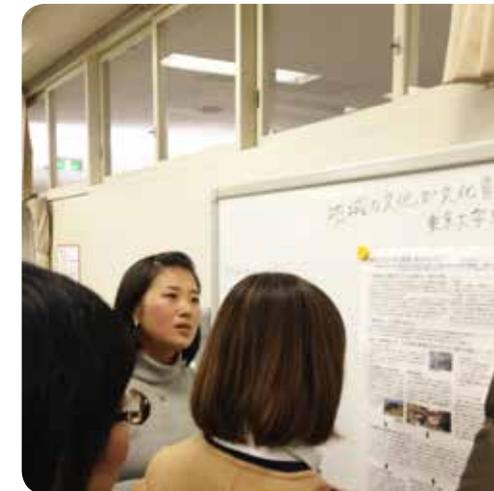
地域衰退の問題に対する「文化資源」という視点の導入

各地の自治体行政は地域の人口減少や産業の衰退に対処すべく、さまざまな問題解決方法を模索していますが、そこでは助成制度による転入・定住促進や産業誘致活動による雇用創出など、全国一様な努力がなされ、その効果も経済的な側面からのみ評価されがちです。しかし、地域の未来を考えると、そのような経済的側面だけでなく、活用できる資源を見つけ出すという行為を通じて、まだ認識されていないその地域の文化的な可能性（文化資源）を探り、地域の活性化について考えていくことができます。小林ゼミでは、文化をイベント開催という一過性のアプローチとしてとらえるのではなく、長期的な視野に立って「地域の文化が文化資源に変わるとき」にどのような可能性が拓かれるのか、地域の人々が自らの地域を再考する機会をつくれるよう活動を行っています。

長野県大町市—ふたたびの活性化に向けて「文化的に豊かになる」ことの発見と共有—

◆大町市における文化資源となりうる事象の抽出

- ・北アルプスと「山岳文化都市」構想
- ・持続可能なエネルギーについて考える拠点
- ・クラフト作家の集積と活動
- ・アーティストが始めた「原始感覚美術祭」
- ・夏期大学発祥の地
- ・山村留学発祥の地
- ・活発な市民活動
- ・勉強と実験の場「おおまちラボラトリ」



◆文化を通じたつながりから活性化へ—大町の市民活動の可能性と行政の役割—

〔2012年度〕
小林ゼミでは市の規模に対してさまざまな活動や施設があるという大町市の状況に対して、市（行政）と市民で認識の食い違いがあるという課題を指摘することで、行政と市民が対話してつながるきっかけづくりをしました。
〔2013年度〕
市役所の若手職員の懇談会活動開始などの意識の変化、市民と行政による瀬戸内国際芸術祭の視察などの動きが出てきました。

左記の大町市の「文化資源となりうる事象」が認識され、地域の活力を生み出す広がりをもつことができるようになるためには、小林ゼミでは大町市の行政の役割が重要と考えました。活発な市民による文化活動に対して行政自ら文化を発信するのではなく、市民主体の文化のまちづくりのための環境整備をすることに大町市の活性化への鍵があると分析しました。

まとめ

地域に根付いた文化がもつ可能性が「発見」され、その価値が地域で「共有」され、行政、市民、民間団体などがそれぞれの役割を果たしながら「活用」されるという段階を経ることによって、「文化が文化資源に変わる」と私たちは考えました。「文化で豊かになること」は特殊な地域に限られたことではなく、地域が持つ固有の文化資源に気づき、活用に向けた取り組みをどれだけ行うことができるかが重要だと考えました。「地域の文化が文化資源に変わるとき」にこそ、新たな豊かさの選択肢や可能性が広がり、地域再生の実現が近づいていきます。

2014 年度ポスターセッション「地域と大学の素敵な関係！？」解説



日本文化政策学会 第8回年次研究大会
 日時:2014年12月6日(土)、12月7日(日)
 場所:京都橘大学

大学と地域との協働による地域再生や活性化に向けた取り組みが全国各地で増えていることから、「地域と大学の素敵な関係」を実現するために何が必要であるかの考察を試みました。ポスター1枚目では、小林ゼミと大町市との関りの経緯、大町市の基本情報、地域と大学の

協働事例を行政との関係に絞って提示し、2枚目では、2014年度の取り組み状況を年表形式で紹介し、3枚目では、「大町市文化資源活用ビジョン策定」「大町冬期芸術大学事業」の実施体制を示しました。

まとめ

地域と大学が協働していくことで得られる双方の利点として、
 地域側の利点は、

- 行政にはない柔軟なアイデアやフレッシュな発想を得ることができる
- 他地域の事例等、大学で蓄積された幅広い情報の提供を受けられる

大学側の利点は、

- 研究と実践をつないだ思考を養うことができる
- リアルな現場を実感し、視野を広げることができる

一方、課題としては、今回の大町市と小林ゼミについていうと、以下の点があげられました。

- 長野と東京ということで、地理的な距離が離れているために、小林ゼミが頻りに訪問することが難しく、普段離れた場所にいる自分たちに何が、どこまで、どのような方法でできるのか
 - 自分たちの居住地以外の、芸術文化も含んだ生活環境についてイメージが持ちにくい、学生側の思いやアイデアと、大町市の現状とのギャップをどう埋めていくのか
- また、地域と大学全般について言える大学側の課題としては、
- 学生によって、各自がもっている能力や意欲の度合いが違うため、常に全体の進行管理に気を配らなければならない
- これについては、事業内容ごとに、教員と地域側とのパイプ役を務めてくれるようなリーダー的存在の学生を置けるかどうか、思いのほか重要なポイントであると思われます。

地域、特に行政側の課題は、

- 部外者である大学を巻き込むことで連絡調整等の庶務、経理といった事務が発生し、担当部局の職員に負担がかかる
 - 市民だけでなく行政内部の中にも、そもそも大学に対して、本当に信頼が置けるのか、どこまで自分たちのことを真剣に考えてくれるのかという不安をもつ人々がいる可能性がある
- 以上のことから、行政は、その内外に対して理解と協力を得ていく努力をしなければなりません。

地域と大学が協働して素敵な関係を築くのに欠かさないのは、お互いの役割と責任を明確に分け、予算面を含め依存し過ぎることなく、持続可能な仕組みを構築することです。地域活性の成果はすぐに目に見えるものではありません。そのため、単年度ではなく複数年かけた試みが望ましいですが、行政も大学も、職員や学生が入り替わっていくので、それぞれが内部での情報共有と、次の担当者への引き継ぎをしっかりと行っていくことが必要です。

行政は、ただ大学に任せておけばよいという考えではなく、地元住民による視点や要望を常に汲みながら、舵を取るのはあくまで自分たちだということをもつこと、そして大学側は、離れた場所にいたとしても、他人事としてではなく、いかに当事者意識をもって、学生それぞれの能力を活かしながら取り組むことができるかが鍵となってくるでしょう。





2014年度 大町プロジェクト本格始動へ!

地域文化コーディネーター派遣モデル事業とは？

一般財団法人地域創造は、文化・芸術の振興による創造性豊かな地域づくりを目的として、設立された総務省関連の法人で、この財団が行う文化芸術を用いた地域活性化に知見とノウハウをもつ地域文化コーディネーターを派遣するのが「地域文化コーディネーター派遣モデル事業」です。ここでは、大町市内にある文化的資源や芸術活動を再発掘し、検証をした上で、それらを活用する方法を市民と行政が協働して検討していきます。市民が地域の魅力を今以上に知り、地域に愛着をもつことができ、また各分野の市民や団体及び企業等のネットワークが構築されてつながり、価値の共有が図られることにより、市民の主体的な活動が活発化することが期待されます。それとともに、行政も市の発展の可能性が広がっていくことを自覚していくことを目指します。

また、その活動を継続して実施していくための仕組みづくりを構築するために、大町冬期芸術大学を実施します。市民と行政の役割が明確となり、継続的な地域の発展の可能性を見出し、将来的に、大町市の総合計画へ文化・芸術振興によるまちづくりを盛り込むことを目的とします。そのためにこれまで大町市ではかつて行なわれてこなかった芸術系・アートマネジメント系の講座・ワークショップを開催し、新しい人材を発掘・育成を行います。

2014年度地域文化コーディネーター派遣モデル事業	
文化資源活用ビジョン策定プロジェクト	大町冬期芸術大学プロジェクト
<ul style="list-style-type: none">◆文化・芸術関連団体、市民に対するアンケートおよびヒヤリング、分析◆市民文化会議の企画・運営	<ul style="list-style-type: none">◆関係者向けプレダンスワークショップ◆ワークショップ・講座の開催、運営<ul style="list-style-type: none">・企画プロデュースコース・パフォーマンスコース・ファッションコース・空間美術コース◆成果発表パフォーマンスの開催
<ul style="list-style-type: none">◆広報<ul style="list-style-type: none">・ニュースレター「ばもす！おおまち」の企画・発行・大町冬期芸術大学 facebook の企画・運営	
経過報告・展示の開催・報告書の作成	

「大町冬期芸術大学」の開講と「大町市文化資源活用ビジョン」策定に向けた準備

事業運営のためのグルーピングと役割分担

小林ゼミでは、計画事業係（計画に必要な調査担当）・大町冬期芸術大学係（4つの講座の運営担当）・広報係（発信作業担当）・記録係（報告書作成、アーカイブ作成担当）に学生が分かれ、「大町冬期芸術大学」開講と「大町市文化資源活用ビジョン」の策定に向けて、各班が大町市の生涯学習課とともに具体的に動き始めました。

◆伊藤キム氏講義「ダンスを社会の中へ」

大町冬期芸術大学講師を務めるダンサー伊藤キム氏をお招きし、いくつかご自身が関わったプロジェクトの動画を見せてもらいました。「おやじカフェ」プロジェクトでは、普通の「おやじ」さんたちが「おやじ」というイメージをユーモアに変えて踊り始め、不思議な雰囲気形成しながら周囲の人々を巻き込んでいく楽しい空間が紹介されました。アーティストと地域の交流による試みの事例から、文化を通じて地域独自の未来を創造する可能性をゼミ生が改めて考える機会となりました。



伊藤氏による講義の様子



第1回公開研究会の様子
講師の五井利明氏

公開研究会を通じてコーディネート事業を考える

小林ゼミの通常授業時には「大町冬期芸術大学」開講に向けて、多方面から文化行政・政策、まちづくりに関して考察を深めるために、コーディネーター、文化施設の運営者など各領域で活躍している方々を招き、公開研究会を2回開催しました。



第2回公開研究会の様子

◆第1回公開研究会「地域をコーディネートするということ」

初回の公開研究会には元地方公務員で2012年度から内閣府地域活性化伝道師に就任し、現在ではNPOを支援するNPO「CRファクトリー」の事務局長として活躍されている五井利明氏を迎えました。コミュニティ活動を形成するにはさまざまな関わり方の可能性を開いておくこと、参加者のスキルの違いや参加に割ける時間の差、優先順位がバラバラであることなども視野に入れながらのファシリテーションのポイントを学びました。

さらに五井利氏がプロジェクト・コーディネーターとして参加している「ものがたり法人 Fire Works」による地域を巻きこんでの映画制作経験についてもお話しいただきました。

質疑応答では「よい組織としての状態とは?」「ファシリテーションの人員配置のポイント」などの話題が話し合われました。

◆第2回公開研究会「市民主体の文化施設運営」

第2回公開研究会は、愛知県の武豊町民会館（ゆめたろうプラザ）の運営をしている「NPO たけとよ」事務局長の高橋洋子氏と、副理事長の高木正博氏、スタッフの高木幸江氏を招きました。

武豊町は、1998年の町民会館建設計画を含んだ「第4次武豊町総合計画」から、2004年の町民会館の開館まで住民が参画していることが特徴で、「NHK クローズアップ現代」でも紹介されました。公募による市民との20回にわたるワークショップ開催だけでなく、積極的に運営に関わろうとする市民が、その知識と方法を学んでいきました。ゆめたろうプラザ開館の1年前には「NPO たけとよ」が認証を受け、武豊町と共働しながら会館事業の企画と運営を行っています。近隣地域の文化施設との連携などにより文化事業がさかんに展開され、2013年度には地域創造大賞を受賞するなどモデルケース的な存在です。

武豊町民会館の住民を中心とした試みの成功は、「行政側のサポートと理解」という点にあったようです。これからの大町市の文化事業の活性化についても、市民参画が大事な要素であることがうかがえました。

プレワークショップによる事業理解

大町冬期芸術大学が正式に開講する前の10月23日に大町市公民館分室でプレワークショップが行われました。これは伊藤キム氏による関係者向けのインリーチワークショップで、対象として実施主体である大町市教育委員会を中心とした市役所職員、及び大町市の文化に関わる方たちが参加しました。大町冬期芸術大学で行うダンスのワークショップがどのようなものか実際に経験してもらうことにより理解を深めてもらうことが目的です。

普段ダンスをやったことのない参加者が多いため、最初のうちは不安そうな様子で、伊藤氏の動き方の実演なども見つつ、さまざまな体の動かし方に反応していましたが、動いているうちに参加者間のコミュニケーションも弾み、普段の職場での関係とは違う関係性が発生し、よい雰囲気を醸し出していました。



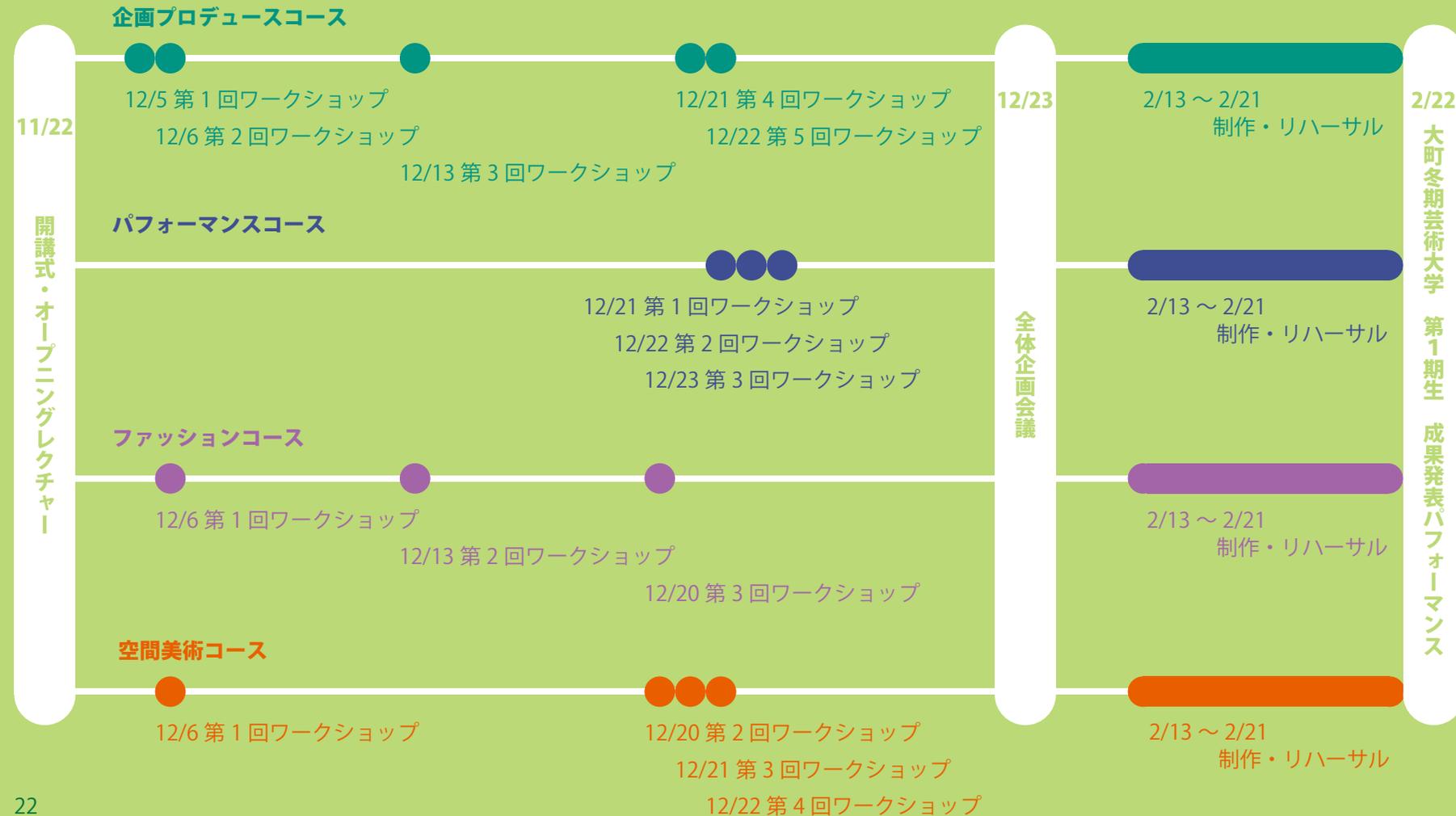
プレワークショップの様子

「大町市文化資源活用ビジョン」への始動

小林ゼミでは「大町市文化資源活用ビジョン」策定を視野に、策定委員会や市民文化会議のサポートの準備、アンケート調査を実施しました。それらの会議やアンケートからあがった大町市の問題点やその解決策は、策定委員会で協議され、ビジョンに反映されていきます。

以上のような準備段階を経て、2014年度の地域文化コーディネーター派遣モデル事業が具体化していきました。

大町冬期芸術大学



「大町冬期芸術大学」が目指したもの

大町冬期芸術大学は、文化資源活用ビジョンによるまちづくりを推進していくにあたって必要な「地域の芸術文化の担い手の発掘と育成」を目的とし、2014年度よりスタートしました。大町市には、1917（大正6）年から毎夏開校し、自然科学、社会科学、人文科学に関する国内第一線の授業が体験できる「信濃木崎夏期大学」があります。大戦期も休むことなく続いたこの夏期大学にあやかり、冬に芸術文化に焦点をあてた講座を開講するこの事業は「大町冬期芸術大学」と名付けられました。この季節の開催には、イベントの多い時期に比べ、家に閉じこもりがちな冬を楽しく過ごせるようにという意図もありました。

プロフェッショナルなアーティストやクリエイターを講師に迎え、複数の芸術系コースを開講します。また同時に、これらのコースを調整し事業の企画運営を学ぶ企画プロデュース（アートマネジメント）コースも設けました。参加者は一般公募し、ワークショップや講座、リハーサルを経て、最終的には全コースの参加者が一緒に成果物を発表します。アーティストの指導のもと、ただの成果発表とするのではなく、観客、そして地域に対して新たな価値観と刺激を提供するような「作品」となることを目指します。この一連の取組みを通じて、芸術文化活動の市民層を拡大し、潜在能力を引き出すとともに、地域で文化振興を行っていく手法を試行し、市職員と市民の企画運営力を高めます。芸術文化の楽しさ、それを軸に人々がつながり、展開していく可能性を実感してもらい、それらをどのように雇用や仕事に結びつけるかまで将来的には視野に入れて考えていきます。



これまで市の文化事業や公民館活動では着目される機会の少なかった芸術ジャンルを積極的に取り入れています。2014年度は、パフォーマンス、ファッション、空間美術、企画プロデュースの4コースを開講しました。大町市にはあまりなかった領域のため、むしろ参加者の年齢や経験、これまでの属性を飛び越えてさまざまなバックボーンの人々が集まり、新たなネットワークの構築が図られました。今後も既存の団体、個々の活動が出会うプラットフォームのような機能を果たすことが期待できます。

しかし、これまであげてきた目的が達成され効果を出していくことは簡単なことではありません。この事業は来年度以降も継続が決定していますが、複数年にわたる丁寧な積み重ねが必要です。実施と検証を繰り返し、時代とニーズに対応したマイナーチェンジを試みながら続けていくことが望まれます。

大町冬期芸術大学 ディレクションの軌跡

人が主役のファッション・ショー

当初より、最後に行く成果発表はオリジナリティのあるファッション・ショーはどうだろうかというアイディアがありました。市の若手職員の発案です。ファッション・ショーという切り口があれば、舞台芸術が身近ではないこの地域の人々にもなじみやすく、いろいろな要素を盛り込むことができるだろうと考え、これをベースにプランを具体化させていきました。ファッション・ショーも最近はさまざまな形態のものがあるかと思いますが、やはり、主役は服。モデルには、いかに服を美しく見せることができるかという能力が求められます。初めての大町冬期芸術大学、その成果発表で、何をみんなに見てもらいたいかと考えた時に、服ではなく人を主役にしたいという思いが強くなりました。そして、これまでの大町市にはあまりなかった表現を持ち込み、従来の美に関する価値観を揺さぶるようなものがないかと。そこで、このファッション・ショーの演出をコンテンポラリーダンスのアーティストにお願いすることにしました。「100人振付家がいれば、100通りの方法論がある」と言われるコンテンポラリーダンス。テクニックを中心に競うのではなく、一人ひとりの特徴を活かした振付によって参加者の個性が引き出され、そして、ユニークな視点を与えてくれるものを目指しました（結果として今回は、企画側の想定をはるかに飛び越えて、服をテーマとした総合的なダンスパフォーマンスへと発展していくこととなりました）。

企画プロデュース講師・アートマネージャー

東京大学大学院人文社会系研究科 修士課程在籍

小倉由佳子

講師陣の決定

舞台芸術のマネージメントを仕事としていた私は、何人かの振付家の活動を市職員に紹介しました。アウトリーチが得意な人、ファッションと親和性の高い人、長野県にゆかりのある人など。作品映像も見てもらい、相談を進める中で、地域の人たちとの活動に意欲をもち経験も豊富な伊藤キムさんの名前があがりました。そして、ファッションコースにはこのジャンルでは珍しくワークショップも積極的に行っている舞台衣装家の川口知美さん、空間美術コースには地元のアーティストであり、大町市で行われている信濃の国原始感覚美術祭のディレクターも務める杉原信幸さんをお願いしました。このような座組は普段一緒に創作を行っている人を揃え、進めやすいようにする人が多いと思いますが、今回の講師陣はむしろ新しい人と組んでみたいという意欲のある人たちで、それぞれ初顔合わせとなりました。そして、小林真理先生を中心に東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻の私たちが企画プロデュースコースを担うこととなりました。

会場選び

また、文化施設が実施する事業とは異なり、市内のどこでワークショップをやり、最後の成果発表をどこで行うかも決めなければなりません。設備的に最適である大町市文化会館はすでに空き日程が合わず、普段

はパフォーマンスを上演する場でない空間の中から選ばざるを得ない状況でした。伊藤キムさんに大町市に来てもらい、一緒に10カ所近くの候補地を見て回りました。魅力的な場所であっても冬の時期の上演がコンディショ的に難しかったり、バタバタと動き回る内容は敬遠されたりといういろいろありましたが、最終的に平公民館・講堂での実施を決めました。ここが、市民活動のコミュニティの場であり生活空間に近いこと、理解のある職員がいること、大きな講堂は工夫すれば劇場仕様にできることが決め手でした。

募集準備、広報

早速、各講師とスケジュールや内容についての調整を進めつつ、募集準備を始めました。チラシでは、これまでの大町市にはなかったイメージを打ち出したい市職員の希望と今年度から開催される新事業を分かりやすく伝えることの二つを軸に、デザインを固めていきました。キャッチフレーズは「あなたの個性とあなたの気持ちを表現できる、そんな場所が誕生します」。出来上がったチラシは、市報とともに全戸配布されるだけでなく、担当市職員がとにかくたくさんの方の目につくようにと、直接足を運び説明しながら情報を拡散しました。市内各所だけでなく市外の芸術系専門学校や大学もターゲットに入れました。この頑張りが功を奏し、予想以上の反響、応募者が集まることとなりました。

インリーチワークショップの開催

これらと同時期に進めたことで重要なことが一つあります。それは、コンテンポラリーダンスをまずは主催をする大町市職員に知ってもらうために、関係者向け、いわゆる「インリーチワークショップ」を行ったことです。教育長をはじめ担当部署となる教育委員会・生涯学習課の職員、声をかけた他部署の職員、市内の芸術文化関係者も含め、伊藤キムさんによるダンスワークショップを受けていただきました。これから事業として取りあげるダンスが一体どんなものなのか、言葉で説明してもなかなか伝わらなかったことを体感してもらえました。この事業についての理解が深まり、そしてなによりそれぞれが自分の身体で表現する楽しさを感じてもらえたことが大きな収穫となりました。

このような準備を整え、大町市での新しい芸術文化事業が始動、2014年11月22日の開講式で第一期生をドキドキしながら迎えるに至りました。





市内全戸に配布したチラシ（表）



市内全戸に配布したチラシ（裏）

第1回 大町冬期芸術大学 開講！！

大町冬期芸術大学開講式・オープニングレクチャー

日時：2014年11月22日（金）14:00～

場所：大町市役所東庁舎東大会議室

受講者、市職員、スタッフが初顔合わせ

さまざまな準備を経て、大町冬期芸術大学の開講式が行われました。初年度にあたる今年は、「企画プロデュース」「パフォーマンス」「ファッション」「空間美術」の4つのコースが設けられており、開講式では参加者がそれぞれのコースに分かれて席につき、これからのワークショップを共にする仲間たちと顔合わせをしました。それとともに今回の企画を支える市職員、スタッフとして協力する東京大学小林ゼミのメンバーたちも一堂に会しました。

市長挨拶「大町における新しい文化芸術の第一歩」

最初に荒井今朝一教育長による開会の言葉のあと、牛越徹市長からご挨拶をいただきました。その中で牛越市長は、この大町冬期芸術大学開講は「文化の風薫るおおまち」においての新しい文化芸術の第一歩である」と述べ、また地域創造と小林ゼミが地域づくりに文化芸術を盛り込んでいくために大町の文化全般を調査・分析してきたことについては、「文化と地域は表裏一体である」とし、「文化の共有が現在のまちづくりにつながり、地域を担う市民が文化活動に多く参加できる可能性を広げていく大町冬期芸術大学に期待している。」と語りました。



オープニングレクチャー「芸術・文化でつくる大町の未来」

オープニングレクチャーでは東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻の小林真理准教授による「芸術・文化でつくる大町の未来」と題した講義が行われました。この講義では、地域文化の活動と継承においては市民が主体であり、行政はハード面だけでなく、ソフト面での環境整備をしていく役割があることが重要であると語られました。また海外の事例も紹介され、人と人をつなぎ地域を活性化するための文化振興の重要性が確認され、この大町冬期芸術大学も継続していくことで、大町市での長期にわたる文化政策の展開が期待できると述べました。

記念すべき第一期生として

開講式では、企画プロデュースコースの講師を務める小倉由佳子氏から各コースの日程や内容の説明がありました。小倉氏はこの大町冬期芸術大学を「いろいろな人たちの出会いの場であり、いろいろなプロセスによる人材育成の場でもある」とし、第一期生にあたる今回の参加者に「最初の一番エキサイティングな時期の経験になると思う」と抱負を語りました。

オープニングレクチャーが終わるとオリエンテーションとなり、今回が初めての集まりということで最初は緊張した面持ちだった受講生も各コースでのお互いの自己紹介が始まると次第に打ち解けて、これからのワークショップへの期待を高めていった様子でした。

教えてくれたのはこんな人たち

企画プロデュースコース講師 小倉由佳子



自己紹介

関西の小さなまちで育ち、芸術に触れる機会は限られていました。高校生の時に、テレビで偶然見たパフォーマンスが忘れられず、それに導かれるように舞台の仕事に就きました。その後、より広く文化政策を学ぼうと大学院に入学、そこで小林真理先生が地域文化コーディネーターとして関わる大町市に出会いました。高校生の私はきっと、アーティストとダイレクトにつながる「大町冬期芸術大学」を羨ましく思っているでしょう。

抱負・意気込み

新しく始まったこの企画に、どんな人たちが興味をもってくださるか不安と期待で押しつぶされそうな気持ちになっていたのが、つい最近のことのようです。企画プロデュースコースには、まちの今後を真剣に考え、芸術文化の楽しさを多くの人に伝えようという心意気を持った受講生が集まりました。毎回、時間延長になりながらも、それでも話し足りない気持ちでした。そんな試行錯誤から生まれた一つの場、成果発表をまずはぜひ目撃してください。

プロフィール

2008年4月～2014年3月、アイホール（伊丹市立演劇ホール）ディレクターとして同劇場のプログラムを企画制作。財団法人地域創造「公共ホール現代ダンス活性化事業」サブコーディネーター。京都国際舞台芸術祭などさまざまな公演に関わる。

パフォーマンスコース講師 伊藤キム

自己紹介

私は4歳のとき交通事故で右目を失った。それ以来毎日大学生になるまで病院でもらう白い眼帯をはめていた。だから学校では片目と言われいじめられた。大学時代にダンスを始め、師匠から「これからダンサーを目指すなら黒いアイパッチにしてください！」と言われアイパッチをするようになった。まさか自分が海賊のトレードマークを着けるようになるとは夢にも思わなかった。でもまさにこれが、私が芸術家であることの証しとなっている。「人とは違う顔をそのまま引き受けて生きていくしか僕には道がないのだ」と。私はそういう覚悟をもった伊藤キムという人間です。



抱負・意気込み

私は長年ダンスに携わってきました。ダンスといってもいろいろありますが、みなさんが思い浮かべるようなモノとはかなり違うと思います。あまりダンスっぽくなく、一見そんなにかっこいいわけでもありません。いやむしろ、自分のカッコ悪いこともそのまま引き受けるようなダンスです。これまでプロだけではなく一般市民の方々ともたくさん仕事をしてきました。そこで感じるのは「なんて多くの人自分がさらけ出せないで苦しんでいるのか！」ということでした。ダンスパフォーマンスを作るには、参加者それぞれが自分自身を真正面から見つめる必要があります。そのままの自分を引き受け、さらけ出す。大町のみなさんのそういう姿と一緒に見つけていきたいと思っています。

プロフィール

自身の公演活動に加え、教育現場でのワークショップ、中高生との作品制作、おやじが踊って給仕する「おやじカフェ」のプロデュースを国内外で行う。2004年六本木アートナイト 2014パレードの監修。京都造形芸術大学客員教授。

ファッションコース講師 川口知美



自己紹介

フリーランスの舞台衣装家としての楽しみの一つに、新しいものを作り上げる場所とそこに关わる人との出会いがあります。まだ出会ったことのない感覚の交換と摩擦の中で生まれた体感を、着る人の身体と一体となるように素材や色彩やさらには空間と向き合いかたちにして、観る人へと届けるのが私の仕事です。その一連の作業には自らを更新させてくれる力があります。この体感を通して知る生きる楽しみや学びを大町の皆さんと分かち合いたいと思います。

抱負・意気込み

数年前、故郷へ向かうバスの車窓から見た長野県の豊かな景色に“ここに暮らす人といつかモノ作りができないだろうか”と思った記憶があります。この願いは「大町冬期芸術大学」で叶うことになりました。モノを作ることは残すことでもあります。その創造への着想には過去の個人的な体験や伝承が伴い、結果的にそのモノは時空の橋渡しの役割を担います。「ファッション」は広義では流行や衣服ですが、匿名のそれが人の手に渡れば持ち主の記憶をもつ普遍的な個の分身にもなります。歴史は外にあるものと内にあるものが引き合わされることにより生まれるのだと思います。この素晴らしい機会がこれからの町の循環につながるよう、精一杯かつ遊びを忘れぬようにつとめたいと思います。

プロフィール

ESMOD PARIS 卒。1999年よりコンテンポラリーダンスや演劇での衣装制作を主として、インスタレーション作品等のアートの現場でも活躍。さまざまな手法を用い、作家と共同しながら観る／感じるための衣装制作を行う。

空間美術コース講師 杉原信幸

自己紹介

わたしは、大町市の木崎湖畔にある探検家の西丸震哉記念館の裏に住んでいる杉原信幸です。毎年夏に、木崎湖畔で「信濃の国 原始感覚美術祭」という祭りを開催して5年目になります。秘境探検を行った西丸震哉の記念館が中心となっているので、原始感覚をテーマに開催していますが、人が真摯に自然と向き合う時には、原始的な感覚に還っていく、その時におのずと生まれる態度が美術、美しい術なのではないかと思っています。人が自然との境界に連綿と築いてきたものを受け継ぎながら、表現する活動を行っています。



抱負・意気込み

今回、舞台空間の美術という立場から、塩の道の文化や、雪深い大町の自然をテーマに、大町らしい文化を表現するような空間を受講生の方と一緒に、平公民館に作りたいと思っています。大町の文化を深く学んで、表現したいと思いますので、大町にはこんなおもしろい文化があるというようなことがあったら、ぜひ教えてください。大町の冬はとても厳しいですが、雪のアルプスの夕暮れの山なみは、どんなに美しい絵画よりも美しいと思います。そんな美しさをあたりまえに眺めつづけて育まれてきた大町の文化を、厳しい冬を吹き飛ばすような、おもしろいお祭りをつくることで表現したいと思っています。ぜひ、2月22日は平公民館に見に来てください。

プロフィール

1980年長野県生まれ。2007年東京芸術大学大学院絵画科油画専攻修了。国内外での個展、グループ展多数。2010年より、アートディレクターとして大町市で「原始感覚美術祭」を毎年主催している。

企画プロデュースコースのあゆみ

第1回ワークショップ

日時：12月5日（金）
19:00～21:00

場所：大町市役所
西会議室

初めて会った人同士インタビューし合い発表する、他己紹介を行いました。その後、大町冬期芸術大学が始まった背景や目指すものについて説明を聞き、このコースの位置づけや今後の流れを確認し、やってみたいことや提案をグループごとに出し合いました。

第2回ワークショップ

日時：12月6日（土）
13:00～15:30

場所：大町市役所
西会議室

企画プロデュースという仕事について、ジャンルや状況によって変わってくる仕事内容を考え、整理をしました。また、成果発表と同日に行われる「まちづくりフォーラム」とを連携させ、広報活動のためのネーミングのアイデアを出し合いました。

第3回ワークショップ

日時：12月13日（土）
13:00～15:30

場所：大町市役所
西会議室

今まで受講者が関わったイベントで困っていることや大町市にあったらいいと思っていることを発表し、それらの改善方法や新たなやり方を考えてみることに講師から提案されました。それを受けて、具体的に成果発表に向けて行うことについて話し合いました。

第4回ワークショップ

日時：12月21日（日）
13:00～17:30

場所：大町市役所
西会議室

芸術文化における協働の先進事例を知るために、京都府舞鶴市で活動する一般社団法人 torindo 代表理事、まいづる RB ディレクターの森真理子さんと愛知県武豊町の町民会館（ゆめたろうプラザ）を運営する NPO たけとよの高橋洋子さん（事務局長）、高木正博さん（副理事長）を迎えました。

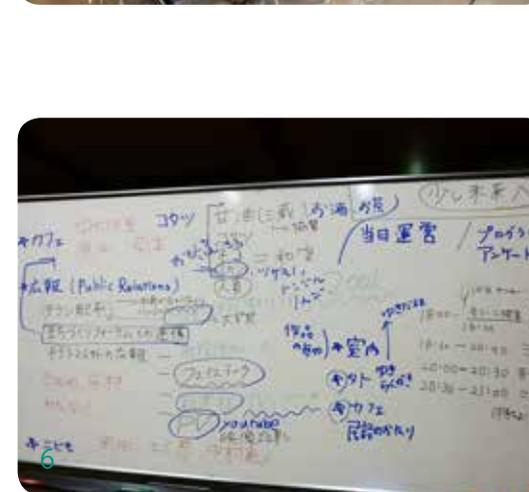
第5回ワークショップ

日時：12月22日（月）
19:00～21:30

場所：大町市役所
西会議室

前回の講座から、他の地域にできて大町市がまだできていないことを考えました。その後は、成果発表に向けて当日カフェを担当するカフェ班、子どもを巻込む企画を考える子ども班、情報拡散を試みる広報班の3チームに分かれて今後活動していくことになりました。

企画プロデュースコース 活動の記録



1_ マネージメントについて学びながら、実際の企画立案、運営を行っていくこのコースには、年齢層もさまざまな10名以上の方々が参加しました。

2_ 第4回目「他地域の事例を知る」レクチャーでの、地域の文化活性化に関わってきた当事者からの講義は受講者にとって大きな刺激となり、さかんに質疑応答が行われました。



3_ 武豊町民会館を運営する「NPO たけとよ」の高橋洋子氏と高木正博氏



4_ 京都府舞鶴市で活躍するアートディレクター、一般社団法人 torindo 代表理事の森真理子氏

5,6_ 講座最終回では成果発表会に向けて「カフェ班」「広報班」「子ども班」に分かれ、具体的な企画の検討が行われました。講座終了後も発表日に向けて各班で活動を継続していくことが決まりました。

パフォーマンスコースのあゆみ

第1回ワークショップ

日時：12月21日（日）

16:00～19:00

場所：大町公民館分室

まずは「名の無い動き」をすること、つまりコンテンポラリーダンスが「既存のスタイルにとらわれず、自分の中を探っていくような動きをする」ということが共有されました。次に受講生各自が思い入れのある服を持ち寄り、「服と関わる」動きをするワークショップが行われました。受講生たちは床に置いた服を振ったり、飛ばしたり、逆さに着るといった、通常着用することとは異なる動きから「服」と「身体」の関わりを再認識していました。

第2回ワークショップ

日時：12月22日（月）

18:30～21:30

場所：大町公民館分室

2回目は日常の身体から舞台上の身体へ、「動く」という行為を変容させるためのワークショップでした。自分の体のどこが伸びているのか、どこを伸ばしているのか意識することから、「激しい」、「繰り返し」、「ゆっくり」、「止まる」という行為（インプロ4）を身に着けました。この日の最後は3人グループでインプロ4や全員共通の動き等のバリエーションを通じて、他者の動きと自分の動きをコントロールしていきました。

第3回ワークショップ

日時：12月23日（火）

14:00～17:00

場所：平公民館

これまで「頭で考えすぎないで動くこと」が多かったものの、ワークショップ最終回は「自分の動きを客観視しつつ動くこと」に重きが置かれました。目をしっかりあけるべしという教えは「自分だけの世界に入り込まず、体の中にあるものを空間と共有する」ための教訓でした。3日間のワークショップの終わりには、自分で振付を作り、時に言葉を用いながら、また服を使ったりしながら、ステージを想定した動きをるところまで受講生の技術を高めることができました。

パフォーマンスコース 活動の記録



1_ 床に横たわり、最も低い地点の姿勢から動きをかたち作ります。もがいたり、うごめいたりするようなポーズになります。

2_ 伊藤キム氏からのアドバイスを受けている様子です。よい点、よくなかった点について鋭い指摘が飛びます。

3_ 縮こまり、伸び広がっていく動きです。指先や顔まで神経を行きわたらせて変化を表現していきます。

4_ インプロ4を交えたグループでのワーク。3人がそれぞれの動きを意識し合いながら存分に身体を動かします。

ファッションコースのあゆみ

第1回ワークショップ

日時：12月6日（土）
16:00～19:00

場所：大町市役所 第4会議室

「衣装づくりに対する心の在り方」というテーマで講義は始まり、川口知美氏制作の過去の舞台衣装の画像が紹介されました。ファッションと衣装との比較、舞台衣装の役割、衣装作りに必要な視点と視野、制作の手順や目的についてのレクチャーののち、受講者が自分の思いを語る「好きな洋服の紹介」をしました。実際の作業だけでなく、こうした知識の交換、話し合いもファッションコースの大事な要素です。

第2回ワークショップ

日時：12月13日（土）
14:00～17:00

場所：大町市役所 第4会議室

講義では舞台衣装、舞台衣装制作の過程について学んだのち実技に移り、Tシャツを使ってAグループはヨガパンツの制作、Bグループは見立てによる自由制作を行いました。それぞれ次回までの宿題として作品を完成させた上でA：「素材にしたTシャツ、配色、どういう思いか、何を思い出して作ったか」、B：「何をイメージしたか、感じさせたかったか。なぜ、その素材を使ったか。細かい仕様はどうしたか」について言葉で説明できるようにしていただくことが課題となりました。

第3回ワークショップ

日時：12月20日（土）
14:00～17:00

場所：大町市役所 第4会議室

宿題の作品発表を行い、思い出の服を通して自分の心を深く探ること、自分の感じたことを一度心の中で「思い・感覚」から「かたち」に変換する作業を経て、制作を行っていくこと、それを言葉にすることなど、舞台衣装をパフォーマー、舞台美術とともに作り上げて行く方法を学びました。12月20日の講座のあとには「場を感じるための『私』を作る」「動き始めた時にみるもの」「空間の把握」といった視点から空間美術コース、12月21日にはパフォーマンスコースを見学し、自分たちの成果発表の衣装についての構想を深めました。

ファッションコース 活動の記録



1_ このコースには、ファッションコーディネートやスタイリング、デザイン、裁縫などに興味をもっている受講者が10人以上集まりました。日常の衣服を作るのではない、新しい体験が始まりました。

2_ 川口氏は「衣服とは何か?」「ファッションとは何か」と問いかね、日常着と舞台衣装の違いについて、自分自身の過去の作品の映像を見せながら説明を行っていきました。

3_ 第2回目のワークショップでは、講師が、現時点で考えられている舞台コンセプトと舞台衣装制作の過程について説明した後、参加者をグループ分けして、ヨガパンツの制作と自由制作の二つの作業を行いました。

4,5_ 第3回目の講座では、参加者は前回の課題だったヨガパンツあるいは自由制作の作品について制作過程やテーマを言語化して発表していきます。さらに受講生は舞台衣装を、パフォーマー、舞台美術とともに作り上げていく方法を学びました。成果発表に向けて受講生のうち9名が舞台衣装を作っていくことが決まりました。

空間美術コースのあゆみ

第1回ワークショップ

日時：12月6日（土）
17:00～19:30

場所：大町市役所 西会議室

講師からコースの概要や空間美術について、さらには今後の方向性について説明が行われ、受講生と講座の進め方について話し合いました。その後は、ほかのコースとともに一つの舞台空間を作り上げていくための共通認識を築くワークショップとなりました。

第2回ワークショップ

日時：12月20日（土）
19:00～21:30

場所：麻倉

受講生が各自持ち寄った服などを加工し、麻倉2階に自由に展示しました。受講生全員で作りに上げた空間は不思議とお互いが調和し、一体感をもっていました。パフォーマンスコース講師の伊藤氏、ファッションコース講師の川口氏も見学しました。

第3回ワークショップ

日時：12月21日（日）
14:00～17:00

場所：塩の道ちょうじや

和紙から作った紙漉りで水引を作り、空間を飾りました。杉原氏は毎回、ワークショップで受講生の作品を講評していきました。今回の作品は紙が主なので、非常に小さくささやかなもの。しかし、それらすべてが一体となって場を作り上げていました。

第4回ワークショップ

日時：12月22日（月）
19:00～21:30

場所：平公民館 図書室

受講生が各自持ち寄った和紙や紙、服などの素材を加工し、成果発表の会場となる平公民館で作品を展示しました。図書室にある機織り機や本棚、天井のアクリルボードを活かした展示は、普段とは違った面白い空間を作り出していました。

空間美術コース 活動の記録



1_ 講師の杉原氏から当日のワークショップの説明がなされます。この時点では、平公民館図書室はまだ飾り気のない空間ですが、遊ぶ余地はたくさんありそうです。

2_ よく見てみると、一カ所だけ本が無造作に積まれていたり、不思議な切り絵オブジェが飾られていたり。これらもすべて空間美術の作品なのです。

3_ 本日のワークショップの成果です。さまざまな色、材質、質感の素材から作られた受講生の作品が、図書室を不思議で面白い空間に生まれ変わらせました。成果発表に向けての今後の公民館の空間づくりが検討されました。

4つのコース受講者による全体企画会議

日時：2014年12月23日（火）18:00～21:00

場所：大町市役所西庁舎西会議室

全体企画会議では、各コースの講師と受講生が大町冬期芸術大学の全ワークショップを終えてのち一堂に会し、成果発表に向けて話し合いを行いました。

4つのコースに分かれて進行していた大町冬期芸術大学の活動でしたが、ここでワークショップの成果が互いに報告され、全コースの成果を統合した成果発表への動きへとつながっていきました。

各コースからの報告

◆パフォーマンスコース

- ・自分の体と向き合う基礎訓練
- ・服と関わり合うワーク
- ・関わらない動きについてのワーク

◆空間美術コース

- ・空間美術とは何か、杉原氏と空間美術の関わりについての講義
- ・全員での作品制作（麻倉・塩の道ちょうじや・平公民館の「場づくり」）

◆企画プロデュースコース

- ・他地域のゲストを招いての講演
- ・成果発表に向けた企画立案（広報活動、カフェ運営、子どもの参加）

◆ファッションコース

- ・パフォーミングアーツ全般に関わる座学（「ファッション」や「衣装」などの言葉を解析）
- ・作り手のエピソード記憶（記憶と体感）についての協議
- ・全員でのリメイク作品づくりの実技

成果発表に向けた演出会議

大町冬期芸術大学の成果発表の会場となる平公民館の説明に始まり、講師たちによる構想が発表され、受講生たちからも意見が出ました。大町市が一步先の未来に進めるような刺激あるパフォーマンスを目指す伊藤氏のコンセプトに対し、場から受けるインスピレーションで空間美術作品を作ることを大事にする杉原氏、また伊藤氏や杉原氏のコンセプトに合った衣装制作を模索する川口氏と三者三様の発言がなされ、それらを企画として実現する方法を小倉氏が検討しました。大町市の生涯学習課担当者からは、「大町市の抱える閉塞感を打ち破り、今までの大町市を越えていくような、新しさとの出会いの場になれば」と今回の大町冬期芸術大学にこめる思いが述べられ、受講生たちも自らの大町市に対する率直な思いを語り合いました。

成果発表会の方向性は合意に至らず、翌年の講師会議に持ち越しとなりました。しかし、講師・受講生・市職員たちが「これからの大町」を真剣に考える場となり、大町冬期芸術大学が大町市にとっても、参加者にとっても一つの起爆剤になりうる、という意識を共有することができました。



この全体企画会議ののち、各コースでは年を越えて受講生と講師ともに成果発表に向けて活動を継続していきました。そして2015年2月22日の成果発表パフォーマンスのタイトルは「Yes, I'm dapping!」に決定し、作品コンセプトを象徴するチラシも作成されました。



成果発表パフォーマンスのためのチラシ

リハーサル報告 最後の演出が決まった夜

リハーサル期間：2015年2月13日～21日

場所：平公民館

2月17日19時より、成果発表会のリハーサルが行われました。パフォーマンスコースの受講生に伊藤キム氏はその場で振り付けを提案することもあり、メンバーも動きを確認しながら、その動きを体に染み込ませていくように稽古を重ねました。伊藤氏はメンバーの誰がどんな動きをしたか、それがどうだったかを記憶しつつ作品に組み込んでいきます。

同時に衣装合わせも行われており、ファッションコース受講生は、「衣装ということ意識せず作品を作ったもののNGが出てしまった。しかしそれによって作り直す強さを得た」という経験を話していました。

一方、空間美術コース受講生は公民館の各部屋にて着々と制作を進めており、公民館が非日常的な雰囲気をもと始めていました。

企画プロデュースコース受講生はこれらの進行を見守り、facebookによる情報発信を行い、「こたつカフェ」の運営を検討するなど、成果発表全体のプロデュースを担当していました。

通し稽古の開始時には、全コースの受講生が講堂に集合し、その進行を見守りました。この時点でまだ決まっていなかったことに、作品の最後に衣装に使われた衣服を「切る」演出を実施するかどうかということがあり、この日は受講生で実際にそれをやってみようということになりました。「切る」という言葉に少なからず抵抗感がありながらも、自分たちで実際にハサミを手にし、布を切っていくにしたがって、各人から無邪気な笑いが生



まれていきました。色とりどりの切った布を花びらのように放り投げる人や、それを拾い上げて結び合わせて新しい何かを作る人もありました。

稽古終了後のミーティングでは、「切る」演出について受講生、講師ともに意見を交わしました。その協議から、伊藤氏は「切る」演出をリハーサル前はやめる方向に傾いていたけれども、受講生が実際に体を動かして切ってみることで、頭で考えていた「切る」という行為とは何か違う、笑いの要素や、さらにはこのパフォーマンスのテーマである「脱皮」に通じるような清々しさを感じた様子だったことから、「切る」演出の実施を決めました。

受講生も講師も自分たちの感性をそれぞれの手段で表現し、言語化し、ほかの人たちに伝え、時にはぶつかり、時には融和しながら、一つの舞台を作り上げて行くという行為の中に、大町冬期芸術大学の可能性を感じた夜でした。

受講生のコメント リハーサルに臨んで

◆企画プロデュースコース Hさん

地域も舞台も共通するところがある。今回はいわばトランスフォーメーションがテーマだが、個々人のとらえ方が違う中でどうやっていくかが難しくもあり、おもしろくもある。「プロデュース」ということは大事で、大町をコーディネートするという意識が強くなる。

◆ファッションコース Hさん

大町冬期芸術大学は大町で初めてやることだし、自分でも初めての挑戦。原型をすべてこわしてから作ることに抵抗を感じながら、でも楽しみながら、どこまで行くんだろうと思いつながりながら流されていく快感もあった。ファッションコースは簡単かと思っていたら厳しかった。自分で考えるのは大変で、未知の世界との出会いだった。

◆企画プロデュースコース Nさん

「大町を文化で豊かにしていく」ということに希望を感じていた。小林真理先生の著書も読んだが、講座も面白かった。特に愛知県武豊町の事例ではサイエンス×アートということが参考になった。ワクワクしたし、今後への希望ももてた。子ども向けワークショップ（注：成果発表に先立って大町冬期芸術大学関連企画「家族で楽しむワークショップ おへやにふくをきせよう！」を実施）を開催してみて、自分自身が「作る」ことはあまりしたことがなかったので、子どもの作る姿を見て自分が癒されるような気分があった。そんな感覚が大町全体に広がればいいなと思った。

◆ファッションコース Kさん

ファッションと衣装との違いは勉強になった。他人に見せるだけでなく、トータルなパフォーマンスの中での衣装というのは魂の入っているものだった。作る楽しみがあり、踊りに関わるイメージを重ねながら作っていった。うまい人でなくても参加できること、そして新しい人と古くから住んでいる人の交わりがあったことはよかったと思う。

◆空間美術コース Oさん

チラシを見てすぐ応募を考えたが、講師の杉原信幸氏と話してみても誠実な人柄なので参加を決めた。作品を作ってみて、一人だけでなくみんなと作るということに充実感を覚えた。普段は一人で絵を描いたりしていたが、今回は作品を広く表明する場があったことにも感謝している。「空間美術」ということをよくわかっていない部分もあるが、自分のテーマが見つかったとも思っている。納得して終わることができそう。

◆パフォーマンスコース Nさん

神奈川県相模原市から来ています。たまたま年末、大町に来る機会があったので講座に参加したら翌年の成果発表にも出演することに…(笑)。仕事もあって出演はどうしようかなとも思っていたのですが、岡本太郎の「迷ったら危ない方をとれ！」という言葉に「やったれ！」と思って大町に来ました。大町の人たちの会議は熱いですね。大町と縁ができて、大町の人たちと関わってよかったです！

第一期生 成果発表パフォーマンス 当日配布プログラム

大町冬期芸術大学

Omachi Winter University of the Arts

第一期生

〈成果発表パフォーマンス〉

Yes,
I'm dapping!

2015.2.22.(Sun)

大町市・平公民館講堂

主催：大町市・大町市教育委員会

この事業は一般財団法人地域創造の平成26年度地域文化コーディネーター派遣モデル事業「企画事業助成金」を活用しています。

大町市制施行60周年・合併10年記念事業 少し未来へ 大町市を考慮の一日

主催者あいさつ

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。多くの皆様のご支援を賜り、ここに大町冬期芸術大学第一期生 成果発表パフォーマンスを開催できますことを心より感謝申し上げます。

ほとんどの受講生が初めてのこのようなパフォーマンスに関わることとなります。この日に向けて一同、心をひとつにしてリハーサルを重ねてまいりました。舞台上立つ真摯な姿に、そして舞台裏で着々と準備して来た熱意に、温かい拍手をお送りいただければ幸いです。

最後になりましたが、本日の開催にあたり、惜しみないお力添えをいただきました講師のみなさまとスタッフの方々に、厚く御礼申し上げます。

大町市長 牛越 徹

いよいよ大町冬期芸術大学の成果発表会です。11月下旬に開講式を迎えてからたった3ヶ月しか経っていませんが、受講生の皆さんはプロのアーティストと作品を作る厳しさ、難しさ、楽しさ、喜びを感じていただけているのではないかと思います。ジャンルは異なるとはいえ、プロのアーティストは私たちの、私たちの知らない自分を拓いてくれ、思わぬ自分を引き出してくれます。また見えないものが見えてきたりします。それは、プロのアーティストならではの力だと思っています。しかし、アーティストと出演者や制作者だけがいれば、このようなパフォーマンスができあがるわけではありません。企画プロデュース講座の皆さんは、今回の成果発表会を盛り立て、まだ出会っていない皆さんたちとのつなぎ手となっています。「大学」は4年で一サイクルです。今年はまだ1年生、来年度も続きます。また来年度も新しい参加者をお待ちしております。大町市で、自分の新たな可能性を拓く挑戦と一緒にしましょう。

小林真理 東京大学大学院人文社会科学系研究科准教授

地域文化コーディネーター・企画プロデュース講座

伊藤キム 演出振付
伊藤キム マンズ講師・振付家・ダンサー

私たち芸術家が地域の人たちのためにできることのひとつは、当たり前の日常に戻る空気を送り込めることである種の刺激をもたらすことだと思います。例えば天変地異のように。今回、12月のワークショップから今日の本番まで、私はまさに台風のように突っ走ってきたので、出演者のみなさんとじっくり膝を突き合わせて、ということがほとんどできませんでした。できればもっとしっかり腰を据えた創作をしたかった、というのが正直なところですが、でもみなさんは私の進め方にもじっと耐えてしっかりついてきてくれました。そこには変化や成長がしっかり現れており、そういう瞬間を見るのがとても楽しみでした。

ところで、今回の参加者募集チラシに「あなたの個性と気持ち表現できる場所が誕生します」と書いてありますが、個性・気持ちは、それを発するまでに必死で磨く必要があり、それはそんなに甘いもんじゃなく、ということを付け加えておきます。

服としての役目を終えた古着を裁断し、破壊すると同時に、別の形に造形することで、新しい命を生み出すような制作を行いました。古着には記憶が宿っており、購入した素材とは全く違う表現が生まれました。古着にハサミをいれるには、痛みが伴い、自分では思ってもいなかった事の意味を感じた受講生もいました。共に制作を行う中で、影響しあい、自らの興味を追求していくことで、表現を開放していく体験に繋がったと思います。日常の美の感性をひろく体験に繋がること、また、身体と衣装と共に一つの舞台を作りあげること、一つのお祭を作るような貴重な体験となりました。

大町の文化と平公民館の活動を表現するために、塩の道の塩と山、ちょうじやの標、手標、吊るし籠を作る松坂高子さん、平書道サークル、生け花の青山会、機織りサークルの方に協力を頂き、受講生の展示を行いました。そのような伝統的な文化と、受講生一人一人が職りなす表現が共にあることが、大町の文化であると思いました。

杉原信幸 空間美術講師・美術家

ファッションコースでは、グループとして舞台右奥に吊るされた青と白のグラデーションの大きな布のオブジェを、個人ではパフォーマンスの衣装を制作しました。

モノトーンの衣装はパフォーマンスに合わせてコーディネートで用意し、最終に登場するカラフルな衣装は私が激したコンセプトを元に、各衣装家（受講参加者）自身が着たいと思う服をそれぞれの手法で用意しました。それは「今ではもう会えなくなってしまう人に会うための服」というもので、その人とこの日ここで待ち合わせをしているという設定です。

普段、この様なダンスの衣装は稽古が始まってから制作を行いますが、できない事を逆手に取り敢えて合わない方法を選びました。従って稽古初日がいきなり試着という段取りで、制作物に何の評価ももらえない状況はおそらく全員が初体験で、さらにはその衣装が起点となり、衣装家とダンサーとの対話が生まれたり、目を追う毎に作品に取り込まれて行く様子を体感するもさっとこれまではない感覚だったと思います。過去があるからこそ在る今の自分が未知の状況と対峙した時に何が出来るか、衣装を通して自ら学びを起こせた時に本当の完成は現れます。

川口知美 ファッション講師・衣装家

この大町冬期芸術大学は、今年度から始まったばかりの企画です。主催者も、講師も、参加者も、そして、今日集まってくださった観客のみなさんにとっても、おそらく初めてづくしのことだったと思います。運営も手探りの連続でした。そんななか、まだ例をするのにはつきり分らない、どんなことになるのか先行きが見えない、この第一期生の募集に「見いやっ！」と飛び込んでくれたみなさんの勇気を嬉しく思いました。私自身が培われてきた気持ちでした。

数量化できる評価や効果、説明責任を求められたりすることが多くなった世の中で、（もちろん、これらのことを丁寧にすることは大切ですが）既存の尺度を飛び越えてしまうような、「わけのわからないエネルギー」が放出されるような、そんな場になっていけばいいと思います。今回の作品タイトルは「脱皮」をもじった伊藤キムさんの造語です。次なるステップに向けた、それぞれの脱皮を目標してください。

小倉由佳子 企画プロデュース講師・アートマネージャー

大町冬期芸術大学 第一期生

◆パフォーマンスコース 講師：伊藤キム、講師助手：後藤かおり
中西崇次、金原林、渡辺純子、笠原妙子、石岡享子、大島晴寛、丸山のどか、中村明子、福田太志

◆空間美術コース 講師：杉原信幸
小川健司、赤田悠恵子、百原莉子、渡部崇夫、草間勉、曾根原香里、山本早苗、河東南、杉原信幸

◆ファッションコース 講師：川口知美
西沢泰子、赤田悠恵子、金原林、平林康子、川又久代、遠藤敦子、桑原理恵子、川上佐貴子、三戸昌三彰子、松本武子

◆企画プロデュースコース 講師：小林真理、小倉由佳子
原田香納子、須田美莉、水久保龍、中村千景、赤田明、大田昭司、佐藤壮生、中村直人、北原裕夫、平林美和子、渡部崇輝、吉川正美、菊本壮志

協力：協力：(株)阿部 敬祐社

塩の道ちょうじや、松坂高子、平書道サークル、青山会、機織りサークル、iA大北
東京大学大学院人文社会科学系研究科文化経済学研究所文化経済学講座
「文化政策の諸問題」(指導：小林真理) 受講生
幸助誠、ボルゴリッパ、渡部崇輝、藤原聖、岡村万華社
ベルンチ・マルコス、石田さや、高田あゆみ、松本莉子
金子智哉、笠原真穂子、水村昌博、鎌谷直子、高橋伸雄、鎌又文、
中村太一、水田時裕里

舞台・照明・音響：(株)奥野三光

記録映像・写真：本郷敦史

「大町冬期芸術大学」は、現在、準備中の「文化資源活用ビジョン」によるまちづくりを推進していくにあたって必要な地域の芸術文化の担い手の育成・育成の場となることを期して開催しております。今年度は、企画プロデュース・パフォーマンス・ファッション・空間美術の4コースを開催し、ワークショップ、リハーサルを経て、最終的には全コースの参加者が一緒にひとつの成果発表パフォーマンスを上演することを目標しました。来年度以降も継続を予定しております。

第一期生 成果発表パフォーマンス *Yes, I'm dapping!*

大町に住む人たちが、常に心に秘めていること、いつも気になっているけど言えないこと、またはこれまでの人生で積み上げてきた切なる思いなど、「心の奥に眠っているもの」を思いきりさらけ出してつくり上げる作品。普段着ている「日常」を脱ぎ捨てて、本当の自分自身を見つける「心のファッションショー」。

作品創作では、参加者それぞれの「思い出の服」を持ち寄り、それを元に動き・ストーリーのイメージを発展させていく。



小さい頃にもってもらったよそ行きの服。

おばあちゃんからもらった古いけど味のある服。

自分の給料で初めて買ったスーツ。



誰にも思い出の服があるはず。それは自分の肌のようにもあり、自分自身なのかもしれない。でもそれを大事にしているだけでは、感傷に耽っているだけでは何も始まらない。そこから自由に羽ばたいて、本当の自分を発見するために歩き出す。

大町冬期芸術大学の第一期生の成果発表パフォーマンスが2015年2月22日、18時から大町市平公民館にて250人にのぼる市民を迎えて行われました。

大町冬期芸術大学の第一期生は2014年12月から始まったワークショップ（各コース、3~5回開催）に参加し、特に成果発表を前にした1週間は、毎日の現場入りでリハーサルや仕込み等を行いました。その濃厚な時間を過ごしながら、パフォーマンスのかたちと一緒に作り上げたのが、「Yes, I'm dapping!」という作品です。

この作品は「思い出の服」、「脱皮」、「過去から未来へ」をテーマにしたもので、パフォーマンスコースの講師である、伊藤キム氏の演出・振付で出来上がりました。衣装は「今ではもう会えなくなってしまった人に会うための服」というテーマで作られました。



パフォーマンスコース受講生で構成された出演者が、空間美術コース受講生による舞台美術の中で、ファッションコース受講生が作り上げた衣装をまとい、コンテンポラリーダンスをもとにしたパフォーマンスを見せました。各コースの講師陣の素晴らしいナビゲートのもと、技術（照明、音響、舞台進行）スタッフ以外はすべて大町冬期芸術大学の第一期生によって舞台を完成させたのです。

パフォーマンスが行われた空間は平公民館の講堂でしたが、そこには一つおもしろい仕掛けがありました。そもそもの舞台は使わずに、客席にあたるフロアを横半分に切り分けて、舞台と客席を作ったのです。普段、プロセニウム舞台に慣れている人にとっては、この仕掛けも新鮮な経験だったといえます。

塩の道にも、雪が積もっている北アルプス山脈にも見える舞台美術は、舞台上だけではなく舞台から飛び出て、客席の後ろにも広がっていました。これは空間美術コースの講師杉原信幸氏が、会場全体を展示スペースととらえての空間デザインです。こういった試みは講堂だけでなく公民館全体にわたり広がっており、空間美術コースの受講生が作った作品が図書室や託児室、茶室等で展示されていました。



パフォーマンスには体の表現だけではなく、コトバも表現の一つとして存在していました。そのコトバはテーマの一つである「思い出の服」から発せられるものでした。ファッションコースの講師川口知美氏の指導のもとで受講生がリメイクした衣装が、そのコトバを呼び起こしていきます。



3つのコースが一つになって作り上げた大町冬期芸術大学第一期生の成果発表パフォーマンスでは、当日いらっしゃったお客さんは勿論のこと、受講生も新しい刺激や経験に出会えたことがインタビューやアンケートからうかがえました。その出会いによって、今までの自分から、または、今までのやり方から脱皮し、何かが生まれていく第一歩を踏み出そうというメッセージがこのパフォーマンスに込められていたようです。

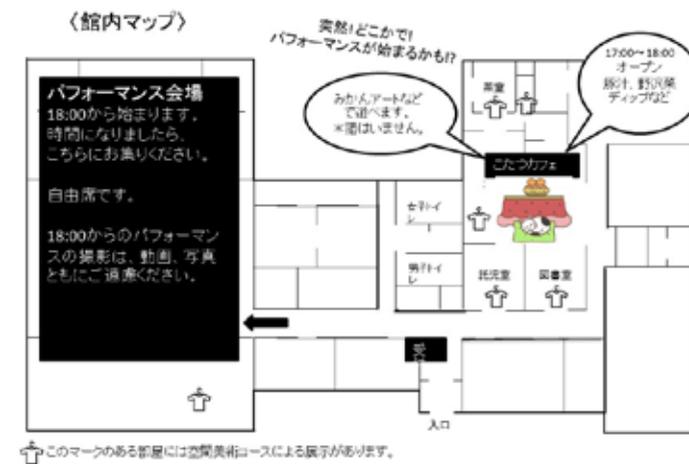


パフォーマンスの最後は、お客さんと一緒になって、ハサミで服を切ったり、切った布を紡いだり、踊ったり、塩の山を蹴飛ばしたりしながら、祝祭的な時間を共にしました。「思い出の服」、「脱皮」、「過去から未来へ」というテーマが会場全体で体感されました。

また、成果発表のパフォーマンスが行われる1時間前からは、企画プロデュースコースが企画した、「こたつカフェ」が公民館の茶室でオープンしました。この



「こたつカフェ」では、豚汁や地域の食材を使ったディップなどがふるまわれ、寒い中來館した市民が大勢集まり、おしゃべりに花を咲かせていました。何とんでも大町の食文化を代表する保存食のひとつである野沢菜漬けを、大町のいろいろな家庭で漬けてもらい、その野沢菜漬けを作った人の顔写真を見ながら食べられたことが、この「こたつカフェ」の一押し企画でもありました。この「こたつカフェ」を目指していらっしゃった方も大勢いました。



本日はご来場ありがとうございます。
何か分からないことがあれば、スタッフまで気軽にお声かけください。

当日館内案内図

「少し未来へ」進んだ今回の大町冬期芸術大学の第一期生。さて、次は何を目指していくのでしょうか。

成果発表を終えて 講師&受講生のコメント

終演後、大町冬期芸術大学の受講生や関係者で片づけをし、調理室にて打ち上げを行いました。ここでも企画プロデュースコースの受講生が中心となって調理された美味しい食べ物とともに各コースの受講生、小林ゼミ生、そして生涯学習課の担当職員がリレー形式で感想を述べ、大町冬期芸術大学にかけた想いを分かち合いました。



パフォーマンスコース・ファッションコース Kさん
受講の理由は参加したら学校で2単位もらえるということだったからです(笑)。大町だからたいしたことないだろうと思ったら、こんなにたくさんの人と関わることができました。生まれてこの方大町に住んでいますが、こんなに楽しいことがあってすごくよかったです。みなさん、ありがとうございました。

パフォーマンスコース講師 伊藤キム氏

みなさん脱皮できましたか？ 今日一日だけでは難しいけれども、これからどんどんみなさんが脱皮していくことに期待しています。僕もそうですけど、みなさんが、自分の持っている価値基準がおびやかされた時に対抗するのか、まあいいかと流すのか、せめぎ合いがあると思います。僕はせつかくだからおびやかされる方がいいと思う方です。それはなかなか難しいことですが、そういうことをやっていってみなさんが少しずつ変わっていったらいいと思います。そして、モノづくりは完成した時は楽しいけれども作っている時は苦しいですね。僕の座右の銘は「芸術はゲロだ！」です。芸術とは、自分の口に無理矢理手を突っ込んで中にあるものを引っ張り出し吐き出すものだ。とても苦しい作業ですが、そうやって吐き出したものこそが、自分にとっての本物だと思います。そういう作業をみなさんにさせていただけたのなら、僕はうれしいです。

企画プロデュースコース Hさん
今回参加させていただいて、多くの方が来てくださってうれしかったです。昨日リハを見たのですが、パフォーマーの方を見てなんだか涙が出てしまって。今日も裏方のつもりで見たのですが、今日はまた違う感じで、空間美術の方や衣装の方が今までやってきたことが活かされた舞台だったと思います。



ファッションコース講師 川口知美氏

大入りでよかったです！ 私自身舞台経験を積んできて、自分が変わっていったのを今回みなさんにも経験してほしかった。舞台衣装というのは、自分の信念で作ったものに他人が関わってくるものなので、そこから人と違うことを知るし、それぞれ違ったところからものを見て発見していくことになります。それは波乱万丈というか、必然的にそうなるのですが、みなさんわれわれに今回そういった経験を起こして下さって本当にありがとうございました。最後に一丸となってこうしてファッションコースができたのは、私だけの力ではなくって、みなさんあってのことだと感謝しています。



市職員 Sさん

11月にチラシを配った時は、こんなにたくさんの方が集まってくれるとは思わなかったので、ありがとうございました。何のためにこんなことするのかと言われてたりもしたのですが、普段会わない人たちが出会って一つのものを作っていくことを見て、今、感動しています。胸がいっぱいで話せないのですが、関係者のみなさまに感謝するとともに、これからも何か一緒にやっていけたらと思います。これからもがんばってまいります。



ファッションコース Kさん

これに参加したのは第一期生であるということが魅力でした。ファッションコースの先に何があるのかわからず不安でしたが、最後に舞台にはきっと素晴らしい「光」が生まれるのではないかと考えてやっていました。人間それぞれの美しさとかすばらしさとかを生で見られる体験でした。それに向けてみんながやっていくというのが楽しくて楽しくて。本当にありがとうございました。



空間美術コース講師 杉原信幸氏

さまざまな記憶の宿る古着を用いて、ワークショップを行い、キムさんの脱皮のコンセプトにより、吊いを込めて制作を行った受講生は、舞台上で作品が破壊されることで、自分の感性を開放するような貴重な体験ができたと思いました。塩の山を作ること自体も楽しかったですが、最後には子どもも大人も年齢に関係なく、自分たちから舞台に出て来てくれて、「塩祭」のような感じで、ああいう場が図らずも作られて、祝祭的な空間が生まれたのがすごかったです。自分のやっている「原始感覚美術祭」の先を行ってしまうような原始的な祭りのエネルギーを感じることができました。



空間美術コース Hさん

最後に塩の山が舞台上で爆発した時に、これは100%間違っていなかったなと思いました。成功したなと思いました。みなさんそれぞれの事情がある中で参加してきましたが、これで終わりではなくて、こういうことがずっと続いていけばいいなと思いますし、大町でこんなすごいことが起こっていることがすばらしくて、東京の国立劇場でやってもいいなって思うくらいです！それぐらいのパワーでこれから10年くらいやっていけたらいいかなと思います。



パフォーマンスコース Wさん

間違っちゃってしまった！（笑）舞台をする羽目になって、どうするのだーと思っていましたが、体はやっぱり不思議ですね。もう少し探求してみようかなと思いました。途中経過はいろいろありましたが、作る過程が大切でいろいろな人とコミュニケーションが取れました。空間美術の装置を見た時に「私はここで踊りたい！」と思いました。ありがとうございました。

ファッションコース Mさん

素材にはお父さんと昔デートした時の服を持ち出したりして、私の担当した人（パフォーマー）がかわいい人で素敵で、一人くらいは派手な感じでいいのではないかと考えて作っていました。うちのコースのほかの人をみるとしゃれたものを作るのですよね。いい仲間がそろったなと思っています。そして、ほかのコースのみなさんと合流することで、よくわからないことは多かったのですが、大町にはすごい方がいっぱいいるなと思ってうれしくなりました。これから何かやる上で参考になることをいっぱいいただきました。



企画プロデュースコース講師 小倉由佳子氏

お客様はなんと250人も来てくれました。最初は170席で十分だと思って、逆に客席が余るのではないかと心配だったのですが、人数が170人に近づいていくにしたがって嬉しいと同時に不安になってしまい、開演直前に急遽キムさんと椅子を追加したりしていました。たくさんお客さんが来てくれたことは本当に嬉しかったです。お声がけをしてくれた参加者のみなさんのおかげだと思いますが、実際に参加してくださった方がこんなにたくさんいたこと、そして、その前で発表している受講生の姿を見て胸が熱くなりました。企画プロデュースコースで運営した、こたつカフェも大盛況でした。11月の開講式からの3カ月、みなさんありがとうございました。



市職員 Kさん

おつかれさまでした。ゼロから見ても何とも言えない気持ちです。見ながら思ったのはいろんな人の時間をもらって今の時間があるのだなと。そう考えたらすごくいい経験をもたらしたし、みなさんもそういう時間をもらってこういう場があるのならすごくいいなと思いました。ありがとうございました。

成果発表 当日アンケート結果

小雨まじりの天候だったにもかかわらず、2月22日の成果発表会には250名近くの方々が平公民館に集まりました。そのうち65名の方からアンケートの回答をいただきました。

1. この企画を何で知りましたか？

◆チラシ	17人
◆市などのホームページ	4人
◆FacebookなどのSNS	5人
◆家族・友人に誘われて	34人
◆その他	8人

2. 舞台の内容はいかがでしたか？

◆良い	37人
◆まあまあ良い	25人
◆あまり良くない	0人
◆悪い	1人

3. その他、今後の参考とするため、ぜひご意見・ご感想などをお聞かせください。

(主な意見・感想)

◆さいご子供がとっても楽しく、ストレス発散！できてたのしかったようです！本格的な舞台にビックリです。ありがとうございましたー

◆雪の中、地味で静かな大町が熱く暑く燃えていました！ステキなパフォーマンスをありがとう！塩で清められ、スッキリしました。

◆はじめて弾けて融けるまで頑張れ。やっちゃえ、やっちゃえ

◆又、大町市民みんなで爆発したいです

◆すごくたくさんお客さんが集まって素晴らしいですね。継続してください。

◆一人ひとりの市民がそれぞれdappingできている様子が伝わりました。今後につなげていって下さい。

◆どんどん遊び心を持ったプロジェクトを進めてほしい

◆もっと新聞などに広報して沢山の人に呼びかけるとよい。会場、公民館もよいが、ホールなどを使っても良い内容。

◆すぐには難しいかもしれませんが少しずつ市全体に広がっていかれたらと思いました。

◆市をあげてこの様な文化活動に力を入れているのは素晴らしいと思う。地方活性化のモデル。みなが経済ばかり語る中、大町の未来は明るい、と感じた。他の自治体も絶対見習うべき！

◆正直、舞台のパフォーマンスが何を表現しているかよく分かりませんでした。人の身体の動きの不思議さに驚き、このような創作ができたのかという新鮮な感動を分けていただきました。大町最高！！です

◆芸術とはすごいですね。これは理解できないですが、珍しいものが見れておもしろかったです。

◆パフォーマンスが個性的でおもしろかった。衣装や舞台も大町と関連していてよく出来ていると思った

◆パフォーマンスはすばらしい。イトウキムさんの力？

◆塩舞台、パフォーマーの身体の変様していく時間、塩舞台 スパーク！！最高の舞台体験でした。たのしい！気持ち良い！！

◆塩がとても楽しかった“いつも”からの脱皮！勇氣 それを超えてのアハハ！すごいな一なかなかやりたくてもからに入った所から出るのはむずかしいよね 物をつくる 動きをつくる 光を 空間をつくるのは楽しい！

◆こたつカフェとってもおいしかったです。ごちそう様でした。ディップのレシピがほしかったです

◆caféが無料でおいしくて感激しました。準備や資金は？ありがとうございました。

◆学園祭に行ったけど部外者はのれない感じ。お祭りの高揚感があったかなあ

◆お塩が子どもの目に入っていたかったです～涙。はさみもどきどきです～

◆開演時間は守って！冬の夜、帰りがそれだけ遅くなるの

◆アンケート結果より

今回は家族や友人のついでで来館された方が多く、チラシによる来場がウェブやSNSを抜いていました。舞台の内容については好評だったといえます。意見や感想としては内容の評価と連動するように「楽しかった！」という肯定的なものが多数でした。最後の「チョキチョキタイム」で観客とともに布にハサミを入れ、大量の塩で遊ぶのが鮮烈だったのか「弾ける」といったキーワードもいくつか見られ、舞台演出が観にいらした方々の潜在的なパワーに大いに響いたようです。楽しかったという感想に並んで多かったのは「たくさん人が集まること」や「広がり」このような「文化事業の継続」を重視する意見です。今後の大町冬期芸術大学の展開を検討していく上で重要なポイントです。舞台が難解…というコメントもありましたが、その難解さを「初めて見た」とポジティブに楽しんでいた意見もいくつかありました。大町に今まであまりなかったジャンルであるコンテンポラリーダンスを持ち込むという今回の企画意図が功を奏したようです。「塩」による舞台も印象的だったようで、「塩の道」を大町の文化とする下地もあってか、舞台、衣装が大町に連動していたことに感銘を受けたという意見もありました。こたつカフェも大好評で、寒い季節のあたたかいふるまいもまた多くの人が集う要因になっていたようです。

辛口の意見としては、内輪受けである、今後は何を残していけるのかという問いかけや、ラストシーンの演出の安全性、開演時間の遅延などについての意見もあり、受付では、こんなの税金を使ってやるんだというコメントもあったそうです。それぞれ貴重な意見として今後の運営に活かしていきたいと思えます。

大町市文化資源活用ビジョン策定

大町市文化資源活用ビジョン策定委員会

11/21 第1回大町市文化資源活用ビジョン策定委員会

3/16 第2回大町市文化資源活用ビジョン策定委員会

市民文化会議

11/22 第1回市民文化会議

12/19 第2回市民文化会議

1/24 第3回市民文化会議

3/16 市民文化会議 特別編

展示

3/16～3/27

2015年度

大町市文化資源活用ビジョン策定

「ビジョン（計画）」は文化をイベントで終わらせないための約束

なぜ大町市に文化の「ビジョン（計画）」が必要なのか

文化による地域活性化という創造的な活動の成果が出るには時間がかかる以上、単発的なイベント事業を長期的なビジョンもなくただ繰り返すだけでは蓄積になりません。条例及び計画ができることによって、大町市での文化政策が長期的に推進する仕組みができます。「実効性のある計画」づくりこそがこれからの大町市を文化で活性化する鍵となっていきます。

「ビジョン（計画）」とは未来の人間行動や社会についての提案であり、未来についての予測、展望が前提となって策定されます。行政における「計画」とは、行政管理機能の一つです。行政はタテ割りの組織構造になっているため、なかなか全体を見わたすことができません。そのため、常に全体を見わたしながら進めるために「計画」がつけられます。しかし問題点として、未来に向けての提案のため、その達成の可能性が見えず、とらえ方が曖昧であることがあげられます。そのため計画を策定するには目に見える目標が必要となります。そういった中、定義が幅広く、正解がない領域ともいえる文化について計画を策定することはさらに難しいことだと言えます。

行政における文化の「計画」は1990年～2000年ごろまでは主に施設建設に向けてのものであり、その施設が建設されると同時に計画も終了していました。多くは建設されることが目標であり、それがどのように運営されるのが望ましいかについては検討されていない状況でした。そのため「ハコモノ」と批判されるような、充分には使われない・活用されない文化施設が次々と建設されるという結果になりました。



「計画」が本当に活かされることで開かれる大町市の可能性

文化の計画の必要性が高まってきたのは2001年に文化芸術振興基本法が制定されたことが契機となります。2003年には地方自治法が改正されて、地方自治体が設置した公の施設には指定管理者制度が導入されます。指定管理者制度を導入することにした地方自治体は、公の施設を通じて提供するサービスの目標や内容を示さなくてはならなくなり、そのことは文化のための計画を必要とする要因ともなりました。

「大町市文化資源活用ビジョン」の場合、ただ文化計画を明文化し、行政的な計画を作ることが目的ではありません。この計画は大町市がもつ文化の独自性を引き出し、文化によって解決できる問題を考え、どれだけ新しいことを文化政策として試せるのか、文化を活用することでどういう地域を目指すのかを目標に掲げて「ビジョン（計画）」として策定します。

ビジョン策定の起点 大町市への小林ゼミによるプレゼンテーション 「大町が発展するにはどうしたらいいか～文化資源を活用する～」

2014年3月に行われたこのプレゼンテーションは、大町市と小林ゼミとの事業が2年目の終わりにさしかかり、具体的な事業の方針が見えず、3年目の事業が継続されるのか否かという瀬戸際で行われました。結果としては2014年度の「大町冬期芸術大学」開講、「大町市文化資源活用ビジョン」策定という具体的な動きを後押ししました。プレゼンテーションでの提言である「条例及び条例に基づく実効性のある計画を立てること」を大町市のやり方で取り組んでいくことになったといえます。

このプレゼンテーションでは市長をはじめとする市の幹部職員に向けて、小林准教授による「地域文化コーディネーターとして関わって」というこれまでの活動報告の後、「大町が発展するにはどうしたらいいか～文化資源を活用する～」と題して、「創造都市論」「文化施設活用の事例」「文化行政論」を交え、以下4点の提示が行われました。

- I. 大町市の課題とこれから
- II. 文化で大町市を振興する
- III. 市民と行政の共通戦略づくりのために
- IV. 戦略づくりのために行政がやるべきこと

I. 大町市の課題とこれから

2012年当初、牛越市長の掲げた大町市の問題は人口流出や産業の不足でしたが、小林ゼミが調査を進めるうちに明らかになったのは、「何もやっ

ていないわけでは決してないのに何となく気がない」という大町の問題でした。ゼミでは牛越市長の「ビジネス・レーバ・トレンド」（2007年）の雑誌インタビュー記事を紐解き、高付加価値・知識集約型で地域特性を最大限に活かした、「創造的産業」に市長が着目されていたことを知りました。

創造性が高まることによって地域が発展する事例については、J・ジェイコブズの都市論において研究されていました。ジェイコブズの『発展する地域 衰退する地域』は、「発展とは自前で価値を生産できるようになること」、「補助金や企業誘致を利用しても依存しない」という論から、その後の創造都市論のきっかけを生んだ書物です。「創造都市論」とは、「創造が起きる地域は文化環境が充実している」「文化環境が充実していれば創造性が高まる」という考え方です。「大町市で文化を振興する」のではなく、「文化で大町市を振興する」という発想の転換こそが、このプレゼンテーションの中心テーマでした。

II. 文化で大町市を振興する

ここでいう「文化」とは、従来の社会教育や生涯学習でいわれていたような「個人のレベルで文化を楽しむ」概念より広いものであって、いうなれば「大町文化」としてイメージされるもの全般にわたります。しかしこ



れまで大町市では、市民によるさまざまな活動を「大町市の文化」あるいは「大北の文化」としてとらえる視点はなく、市民が個々に活動しているに留まり、地域の文化として蓄積されていきませんでした。小林ゼミでは、市民と行政とで“大町の創造性を高める”という共通戦略において、行政の「市民と対話しコーディネートする」という役割の強化に重点を置き、大町市に働きかけてきました。

III. 市民と行政の共通戦略づくりのために

市民と行政の共通戦略をつくるためには、

1. 大町市の文化資源を総ざらいする
2. 大町市で見出される諸価値をまとめられるようなコンセプトを言語化する
3. 市民の創造性を喚起するような活動によって地域社会に働きかける体制を整える

ということを市民と協働で行っていく必要があると提案しました。

このプレゼンテーションでは、1と2についてフランス ナント市の重厚長大産業の衰退を経験した後、文化で都市を再生し創造産業の高付加価値化を実現した例を紹介し、さらに3について福島県いわき市の公立文化施設「いわき芸術文化交流館アリオス」が市民文化の振興とまちのにぎわいの創出を図り、魅力ある地域社会を形成する芸術文化交流施設としての機能を担っている例を紹介しました。また「京都芸術センター」の廃校を活用したアートセンターの例では、地域の歴史や文化が詰まった学校が閉校に伴い新しいタイプの文化施設へと転用され、市民の文化活動や地域を活発化させている事例を提示しました。

IV. 戦略づくりのために行政がやるべきこと

現状の大町市の行政組織は文化行政を推進していくには若干弱い機構になっています。そこで「文化振興担当部局を作ること」と、「条例及び条例に基づく実効性のある計画を立てること」を提案しました。

「文化振興担当部局を作ること」については従来のタテ割行政の概念から離れ、各担当部局の横串となって政策立案や調整が可能となるような立場と視点が必要と考えました。このような意図で文化部局を置く場合、多くの自治体では首長のリーダーシップと責任のもとに文化部局を置く体制が取られています。

また「条例及び条例に基づく実効性ある計画」は、文化振興担当部局の役割や方針を法的に明確化し、事業放置を防止するものにもなり、文化政策実現の原動力として、長期にわたる政策実施を担保するものとなります。加えて、人事異動にかかわらず文化政策を継続することが可能になり、その成果が蓄積されていくという意味でも、文化に基づく地域の発展に向けて条例及び計画の策定は非常に有効なものであるとし、東京都小金井市の条例・計画策定の例を紹介しました。

まとめとして、創造的な活動の成果が出るには時間を要することから、最低10年はかかる覚悟が必要ということを提言しました。長期にわたり政策を継続させ、また財源を確保していくためにも条例や計画は不可欠です。新たな大町市の発展という将来の目標を達成するためには、行政が長期的に地域を運営していく視点をもって文化政策の体制作りを行うことが重要とし、このプレゼンテーションの結びとしました。

第1回大町市文化資源活用ビジョン策定委員会

日時：2014年11月21日（金）

場所：大町市役所本庁舎2階庁議室

大町市文化資源活用ビジョン策定のために必要事項を審議する文化・芸術関係諸団体や民間諸団体の関係者、公募選出の市民による策定委員会が大町市教育委員会に設置され、「第1回大町市文化資源活用ビジョン策定委員会」が開催されました。最初に委員長として水久保節氏、副委員長として浅野久美子氏が選出されたのち、アドバイザーである東京大学大学院文化資源学専攻小林真理准教授が進行を務め、「文化や芸術によって、10年後、どんな大町になってほしいか」について各委員の意見や思いを聞きました。

委員長の水久保氏は「大町市民としての熱い思いから、公募に応じ参加した。大町市が変わるには、今は一番よい時期なのではないか。大町市民が他に頼らず、自分たちでやっていこうという気運を感じる。」と語りました。

副委員長の浅野氏は「以前、大町で開催されていた『祭 in 大町・北安曇』に感動したのをよく覚えている。そこに祈りがあるから文化なのではないか。しかし、そういったものがどんどん希薄になっており、危機感がある。この地に長く続いてきた民俗芸能、喜びの表現のようなものが、10年後、より盛んになっていたらうれしい。」と述べました。

そのほかにも「大町市を自慢できるふるさとにしたい。」「10年後には、大町で美術展や展覧会をすることがステイタスになるようにしたい。」「大町を日本でここでしかない Only One のブランドにしたい。」と、委員の方

たちからは文化によって地元大町の活性化を期待する前向きな意見が出されました。

今後は市民文化会議などの意見もフィードバックしながら審議を進め、2015年度の早い段階でのビジョン策定を目指すということに同意し、委員会は閉会しました。

◆委員一覧

委員長	水久保節（大糸タイムス株式会社）※
副委員長	浅野久美子（四季演劇資料センター）
委員	傘木宗利（昭和電工株式会社 大町事業所） 北原裕美（フォークアート） 杉田浩康（長野県山岳総合センター） 高橋貞夫（木彫家） 成澤隼人（カシマツリ実行委員会） 河専南（コンテンポラリーアーティスト）※ 福島章弘（株式会社市野屋商店） 渡邊充子（創舎わちがい）
アドバイザー	小林真理（東京大学）
委員長、副委員長以下50音順、敬称略。（ ）内は所属等	※の2名は市民公募により選出

大町市文化資源活用ビジョン策定委員 インタビュー

委員長 水久保節氏（大糸タイムス株式会社）



文化は、それによって、そこに住む人が相互に認め合うことができるもの、普遍性のあるものであってほしいと思います。私は「信濃大町 食とアートの廻廊」のようなアートプロジェクトに関わってきましたが、そこに参加した市民が変化するのを感じることができました。また、これからの文化プロジェクトには官民協働が必要です。民には無我夢中でやるということや柔軟さ、官には予算という強み、確実に遂行するという約束があります。これからは、行政と民間が、互いの強みを活かして、責任・役割を分担し合うことが必要です。そして、水という資源を活用することで、大町で二つの自立が実現されるだろうと考えています。一つはエネルギー、もう一つは食料の自立です。それによって、地域が発展し、自立することができると考えています。

高橋貞夫氏（木彫家）



私は大町で生まれ育ち、中央のプロの画壇に挑戦しました。大自然に包まれて生活し、この地ならではの作品を制作してこられたと思っています。以前地元で講習会を開いたとき、市民がいきいきしているのを感じ、文化活動の大切さを実感しました。そして、民俗芸能による創作舞台「祭 in 大町・北安曇」を、大北地域の仲間と共に立ち上げたのは1990年でした。土着の文化を自分たちの手でと英知を出しあい手弁当で、一

副委員長 浅野久美子氏（四季演劇資料センター）



大町の文化資源には、山、自然を活かした行事、札所巡りなどがあります。これらを見ていると、地域社会のつながりを再構成するためのツールとして文化があるように思います。たとえば地域の文化ともいえるお祭りには、できるだけ多くの人に、特に子どもに参加してもらい、さまざまな体験を経て感性を育ててほしいと思います。また、今の町では、文化・芸術活動が個人のものになっている印象があります。芸術家の人は、個人の創作活動を追求することが大切ですが、普段、文化や芸術、創作活動等に触れることのできない人にもアプローチできる場があればいいと思います。そのためには、指導者、支援者の存在、個々の情報や活動の核になるような場所、そしてコミュニティの中心となるものが必要となると思います。

公演300人が携わり、10年の公演を行いました。この活動で文化による地域づくりに寄与することができたのではないかと考えています。15年を経た今年、再演が決まり準備を進めています。仲間の熱い想いは力強く、このような動きは、文化の掘り起こしにも、後継者の育成にもつながります。大町市は、ようやく文化・芸術を語り始めました。若者の頑張る姿にも頼もしさを感じています。互いの立場で夢を語り合うことが大切です。自分たちの力で創り上げることが自信となり、活性化へとつながるのではないのでしょうか。

河専南氏（コンテンポラリーアーティスト）



私は、大町に住み、コンテンポラリーアートを制作しています。これまでは、松本で展示を行っていましたが、ゆくゆくは大町でも活動したいと思っています。これまでの大町市は、情報発信に限界があると感じていました。文化・芸術団体とのネットワークのアイデアとして、大町にも手軽に情報を得られるような、文化芸術のための総合発信センターや、市民ギャラリーのような展示スペースがあればいいと思います。例えば、大町では何か重要なことがあれば、商店街に行きますが、買い物の帰りに、文化の催しや活動の情報を知ることができるように、空き店舗などをうまく利用できないかと思っています。私自身、策定委員になって意識が変わって、「大町市文化資源活用ビジョン」には期待しています。大町のために一人で頑張っている人も少なくないと思います。これからは、そういう人をつなぐネットワークが大切だと思います。

北原裕美氏（フォークアート）



麻倉プロジェクトに関わり、フォークアートを制作しています。大町には掘り出せるものがたくさんあります。このまちに移り住んで、よいことを見つけようとしたら、たくさんの歴史や文化を感じることができました。たとえば、近くの地域では、明治時代からアメリカとの芸術上の交流がありました。大町の自然は大きな魅力ですが、何よりもその中で育った人が資源です。彼らが大町を誇りに思えるよう、文化・芸術、歴史を楽しく子どもたちに伝えていきたいと思っています。まずは、大町の人々の意識の変化、行政の改革が必要だと思います。それによって変わっていくと思います。行政の方々ともたくさん話してきていますが、みんな最終目的は同じだと思います。これまではタテ割り行政であるため、うまくいかないところがありました。今回の「大町市文化資源活用ビジョン」の策定の時には、みんなが一緒に動けるような仕組みにしたいと思っています。

傘木宗利氏（昭和電工株式会社 大町事業所）



大町市に昭和電工が最も貢献しているものは水。大町事業所の自家発電に伴って、豊富な水資源が工業だけでなく農業、生活、防火に振り分けられ、地域の生活に貢献しています。雇用に関しても職員はほとんど地元の人で、採用は今後もコンスタントに続けていく予定です。工場見学を昭和電工から自治会や学校に声をかけるスタイルで始め、今では定着しました。「昭和電工はこんなことをやっているんだ」と理解してもらえるだけで自分たちにとっては充分で、将来何かのきっかけになればという思いでやっています。この地域の方が働く場がなくなれば大町市の経済に対する打撃は大きい。安定的に事業を継続させ、最終的に市民が潤うようにすることが大町市に対するわれわれの役目だと考えています。

福島章弘氏（株式会社市野屋商店）



当社では、近年、仕込み水の使い分けをおこなったり、地元産のお米の使用比率を高めたりしています。私どもが醸造する清酒は、「地酒」とよく呼ばれていますが、そもそも地酒は地元の米、水を用いて醸造されたもので、大町は地形的・地理的にも地酒が育ちやすい環境にあったかと思っています。そして地元の方々に特別に意識することもなく飲んでいただいていたと思います。気が付くと自然に食卓にあるもの、その土地の特徴によって生まれたもの（大町なら漬物・おやき・信州そばなど）すべてが食文化ではないでしょうか。そして食に限らず、その土地ならではの生活の営みそのものが文化だと考えています。これを伝承していくには、この地域にどのような活動や資源や芸術活動があるかに改めて気づき、実際におこなったり行ってみたり、そして理解することが大切だと思います。大町で行われている把握できないほどの多種多様なイベントや活動が認知され、文化や芸術に携わる方々がやりがいを感じ、なおかつここで生業とできることが、ビジョン策定を通じて実現できたらいいですね。

杉田浩康氏（長野県山岳総合センター）



普段は、山岳総合センターで、安全な登山のための講習を行っています。策定委員会に出席して、みんなが大切に思うものが文化であるなら、文化と登山にはつながりがあるのかと思いました。大町は、大町登山案内人組合が日本で初めて立ち上がった、近代登山史上、重要な場所です。大町の人にとって山は、登るためのものではなく、眺めるためのものですが、私は、水、空気や動植物、景色すべてを楽しむのが登山だと思っています。策定委員として「大町市文化資源活用ビジョン」では、大町の人々の山に対する意識改革を進めていきたいと思っています。そのためには、案内人という人材の育成が必要だと思います。また、文化・芸術には経済という土台がしっかりしないとイケません。若い人が出ていかないように、今ある山という資源、そして林業や農業をうまくブランド化すれば、なんとか雇用も創出していけるのではないのでしょうか。

渡邊充子氏（創舎わちがい）



私は工芸の制作に携わっていましたが、結婚、介護を経て40歳になった時、何とかなるだろうと思って大町特産館「いーずら」の活動に飛び込みました。紆余曲折もありましたが「いーずら」は2015年19年目になります。ここ大町は、何をやってもダメな地域であるという意識がある中で、3年間、「いーずら」の運営に真剣に向き合うことにより、何かが見えてきました。その頃、街中の文化や伝統の歴史を知り、何とか次の代へ残していきたいと思い始め、

古民家「わちがい」との出会いがあり、今に至ります。大町で人が人を育てられる環境になればいいですね。行政と市民と一緒に手を組んで進むことばかりです。とりあえずやってみるという、勇気もつべきでしょう。行政が大町をトータルに描いていく上で、食文化は不可欠です。ここ大町だけで出せるものを大事にしないとイケないと思います。10年後には大町を日本でここにしかないOnly Oneのブランドにしたい。壮大な話ですが、「大町市文化資源活用ビジョン」に期待するのは、あらゆる面で「わが町を美しく！」することだと思います。

成澤隼人氏（カシマツリ実行委員会）



私は大町生まれ、大町育ちです。地元で何かできないかという考えで、地元の有志が集まったメンバーで、野外音楽フェス・イベント「カシマツリ」を始めました。大町を元気にして、より長く住んでいただくためには地元の人に魅力がないと、土地の魅力がよくても長続きしないと思いますので、まずは同世代から始めていきたいと思いました。大町には、実りのあるいい話をできる場所がいろいろあります。そのようなコミュニケーションを重ねることによって、一人の人が変化します。そういう変化をもたらすために、行政主体ではふるいから落ちてしまうような明るい発想で、違う意識の人が触れ合える場所をつくるのが大切だと考えています。そのため「大町市文化資源活用ビジョン」では、人と人がつながる場所、本当に情報が行き届くような場所をつくって、より参加しやすい仕組みを整えたいです。そうすると、自然と1ターンやリターンの人たちも増えて、土地としての魅力も上がっていくと思います。



第1回市民文化会議

日時：2014年11月22日（土）

場所：大町市役所東庁舎2階東大会議室

ワークショップは、準備段階から始まっている

「大町市文化資源活用ビジョン」の策定に向けて、ビジョンの方向性を大町市民と一緒に考えるための市民文化会議を開催しました。これは大町市の文化資源や抱えている問題について直接市民の声を聞くことで、今後策定されるビジョンがより大町市民に必要とされる内容になることを目的としたものでした。小林ゼミでは、計画事業班を中心に当日参加メンバーがファシリテーターとなってワークショップをサポートすることになりました。

ファシリテーターとはワークショップの司会進行役です。参加者から言葉を引き出し、意見をつなげ、掘り下げていく役割を担います。それには質問事項の設定や周辺調査を含めた入念な準備が必要です。第1回ワークショップの内容を決定するまでに、ゼミでは形式や質問の仕方、グループ分けの工夫など、いかに参加者が発言しやすくなるかを念頭に検討しました。



最初の会議の参加者は50名近く

市民文化会議は、事前申込制ではなかったため、当日まで参加人数がわかりませんでした。最終的には50名近い参加者が第一回目の会議に集まり、大町市民の文化に対する関心の高さがうかがえました。今回は小林真理准教授からのレクチャー及びアンケート記入の後、参加者を4つのグループに分け、「大町における文化資源とは何か」「その活用の仕方」について話し合いました。

大町市の文化資源については「自然、水、山、森、湖、寒さ、温泉」といった自然についてあげる参加者が多く、また「祭り、神社、流鏝馬」といった伝統文化や、「酒蔵、木材、田んぼ」といった大町市の産業をあげる参加者もいました。さらに、「カシマツリ、アートプロジェクト、バレエ、マラソン」といった比較的新しい動きについても言及されました。これにより、大町市の住民自身が身の回りにある自然や伝統文化、産業を文化資源だと認識していることがわかったと同時に、身近な暮らしに密着した活動についても意識を高くもっていることがわかりました。

文化資源の活用に関しては「大町オリジナル商品（食品や雑貨）の開発」「自然などの体験ツアーの提案」「廃校アート、参加型アート」「まちなかめぐり、外国人対象のまちあるきワークショップ」「食べ歩き」「仕事おこし、教育・行政との関わり、市民参加の場づくり」といった大町市自体が活性化できるような内容が多くありました。文化を文化財保護などの概念に留まらず、生活や体験に結びつけて活用させていくという意見が多く、さまざまなアイデアが出されました。

地域の問題の共有 次の段階へのきっかけに

また大町市が抱える課題としては「文化と経済の関係は大切、生活している人の文化度をあげる、住民に関わってもらう、文化のための生活か、生活のための文化か、営み全体が文化といえるようになればよい」、「地元よさを知るリーダー育成や市民全体のやる気のきっかけをつくりたい」といった産業の活性化やまち全体を引っばるリーダー的存在を必要としている意見が出されました。

ファシリテーターを務めた学生にとっては地域の声を聞くよい機会になったと同時に、市民にとっても「ようやくこの段階にきた」と大町市が文化芸術によって活性化しようとする動きに期待する声がありました。



当日は多くの意見が交わされましたが、それらを実際にビジョンに反映させ、そして実践していくのは大町市民です。第1回目の会議はブレインストーミング的な位置付けでしたが、これから後のワークショップはより具体的に、行動に落とし込んでいくプロセスに移行していかなくてはなりませんでした。

第2回市民文化会議

日時：2014年12月19日（金）

場所：大町市役所東庁舎2階東大会議室

前回のワークショップを受けての検討

第1回目の会議では、参加者から大町市にある文化資源とその活用方法についてたくさんの意見が出されましたが、第2回目のワークショップでは、より具体的な行動に結び付けていくための内容に必要がありました。そこで、小林ゼミでは「大町市で文化活動を行う上での問題」と大テーマを設定しました。それは、大町市で文化資源を活用する時に浮上してくるのはどのような問題なのか。そしてそれは今までどのように解決されてきたのか。今後はどのように解決する糸口があるのか、ということを整理解するための問いでした。



大町市での文化活動の問題を洗い出す

第2回市民文化会議は、平日の遅い時間にもかかわらず19名の参加者がありました。さまざまな市民活動、文化・芸術活動を行っている方々が、大町市の文化活動をめぐる問題について意見を出し合いました。前回同様、参加者の意見を附箋に短い言葉でどんどん書き出してもらい、模造紙の上に貼って共有した上でまとめるというワークショップの形式（KJ法）を用いて、最後は2つの班の意見をそれぞれ参加者の代表に発表してもらいました。

◆文化活動を行う上でこれまでに感じてきた問題は何ですか？

この最初の問いには、「お金」、「自分の活動は多くの人を楽しむものではない、理解されない」、「活動に関わる人数」「人集め」、「活動については、知識がないとわかってもらえない」、「夏期大学がもっと開かれていたらいのに」、「大町には文化イベントはたくさんある、多すぎるくらいだと思う」という問題が出されました。どれも一人では解決できない問題で、参加者はみな切実な問題に直面してきたことがわかりました。

◆このような問題に対処するために、実際にどのような行動を起こしましたか？

ここでは「人手不足という問題に対して、個人的に声をかけて人を呼び込んだ」、「情報がまとまっていないという問題に対して、自分で自治体の情報を整理してみた」、「中学校で授業を行った」、「助成金に応募してみた」、「文化施設への送迎のボランティアはやったことがある」、「大町の活動一覧をつくってみた」のようにさまざまな工夫がなされてきたことが口々に話されました。しかしその一方で、「そもそも趣味で行ってきたものなのに、大町の文化といえるのだろうか？」という戸惑いの声や、「安全性の問題は個人で行うのだと限界がある」というさらなる問題も出ました。



◆なぜ行動を起こせなかったのですか？解決のためのアイデアにはどのようなものがあると思いますか。

この問いについても、かなり参加者の思いが吐露されることとなりました。「他の人がやってくれるかなとみていた」、「自分では、動けなかった」、「地域文化の継承は、そもそもそこに暮らしている人の数が減ってしまうと難しいところがある」、「自分ひとりでは…」、「資金が足りない！」など。解決のためのアイデアも「役所では解決されない」、「役所を使ってほしい」、「何よりも自分でやってみることが大事」、「それでは個人の問題になっちゃう」といった意見がぶつかりはじめました。

「課題はたくさんあるのはわかった、方向性をつける人が大事なのは？」、「そのリーダーシップは誰がとるのか」、「市がイニシアティブをとらないと、政治の問題はどうにもならない」、「そのためにビジョンが必要なんじゃないの」というように議論が深まり、一つの落とし所は、「人材の育成が必要」となりました。

ワークショップの感想として「自分の活動も大町文化に関係するとわかった気がする」というところから「こういう話し合う機会が必要」として、もう一つの落とし所として「場が必要」がまとめられました。しかし何とんでも全員が共有したのは「今日ここで話し合ったことを、一言でまとめることは不可能！」でした。

さらなる議論が求められる中、最後のワークショップへ

最後に、青と赤、二つのグループごとに話し合ったことをまとめて、発表しました。課題解決については前述のように、青グループでは「場の存在」について、赤グループでは「人材の育成」について活発に議論がなされていました。すぐに解決策が結論づけられるわけではないにしろ、今回のワークショップで、文化活動をする大町市民がそれぞれ問題を抱えており、それを共有し合えたこと、そしてその解決策にもさまざまなアイデアがあること、解決のためにみんなでもっと深めていくべき事柄があるとわかったことは大きな収穫だったといえるでしょう。

第3回目のワークショップはこれらをまとめた上で文化資源活用ビジョンの策定に反映しうるような素材にするための機会にしなくてはなりません。小林ゼミでのワークショップ準備はさらに流れを作り込んでさまざまな意見に対応できるよう臨機応変なファシリテーションが求められるところとなっていきました。

第3回市民文化会議

日時：2015年1月24日（土）

場所：大町市役所東庁舎2階東大会議室

よき議論の呼び水になるために

二度のワークショップを経て、大町市の文化資源とは何か、その活用にあたって問題になるのは何か、どのような解決方法があるのかということが、段々と浮かび上がってきました。しかし第3回目は最後のワークショップであり、ある程度のまとめをしなくてはならない肝心なめの段階です。この市民文化会議は気軽に多くの市民に参加してほしいという理由で参加を事前申し込み不要としていたのですが、毎回どのような市民が何名参加するのか分からないという点が難しいところでした。そのため、この第3回目は、初めての参加者にもこれまでの経過を理解してもらった上で発言をしてもらい議論を深めなくてはならないという課題が、ファシリテーターに課せられました。ゼミではファシリテーターとなるメンバーの作成したプランにそって何度もワークショップの練習を行い、疑問点やうまく返答できないことがあるたびに進行を止めて、「質問は適切だったか」など、つぶさに検討し準備を進めました。また、もし議論が進まない、イメージが沸かないといった場合に備えて、事例を出せるように他の自治体や文化施設の情報も調査して当日に臨みました。

最終回は「人」と「場」について集中協議

第3回市民文化会議には、38名の大町市民が参加しました。内容としては、前回までのワークショップで出た問題点から大町市の課題を交流や人材の不足について話し合う「人」と、それぞれの活動に必要な場所の不足について話し合う「場」の2つのグループに分け、参加者がもつ問題意識からどちらかのグループを選択してもらいました。また、当初どちらのグループに属すか決めることができなかったグループは「人」の問題について話し合うことになりました。グループに分かれた後の流れとしては、それぞれの班でこれまでの市民文化会議で出た問題点を分類した資料を共有しつつ、その内容について議論するというものでした。参加者が資料には含まれていない課題を思いついた場合は、適宜ファシリテーターが模造紙に書き込み、参加者もそれを見ながら議論を進めました。



既存の場の活用 交流の仕組みづくり

「場」のグループでは作品を展示する場の不足、文化会館や大町北高、山岳博物館等の既存の施設の活用も広さや費用の高さ、設備の悪さ、気軽に集まれる場所、世代間交流の場所の不足が課題としてあげられました。その解決方法として個人利用もしやすい規模と使用料金の小ホールを設ける、既存の施設を利用するとしても、たとえば文化会館の利用料金を減免する、外から来た新しい人を取り込むことが大町市の発展に必要であることから、空き店舗や空き家を活用し、地元の人だけでなく旅人も気軽に集まれる場を見つけ出し運営する仕組みと人材が必要であること、交流を促進できる人材や仕掛けの必要性があげられました。

コーディネーターとしての人材 市民が主体となる活動

「人」のグループでは大町市の問題点として、コーディネーターをする人材や次の段階まで見通しを立てて引っ張っていく人材、情報発信、交流する場の不足があげられました。その他にも、大町市民自らの意識が内向きで誰か他の人がやってくれることを待っている傾向にあること、発表や制作に相応しい既存の場所がないことが課題となりました。これらの問題を解決するために、コーディネーターを育てる環境と同時に、最終段階までは行政に頼りすぎず、まずは自分たちが主体になってやっていくことの重要性が議題にあがりました。また、それぞれの団体の情報発信とそれを取りまとめ拡散していく存在が必要であるということも意見として出されました。さらに、多様な団体が継続的に刺激を与え合える場、自分たちを理解してもらおう（情報共有のための）出会いの場が必要という意見が出され、ともにあがっていた「場」の問題の解決のためにも、これまで使ってきた場所を見直してみることや、それを利用しやすくするための明確な目標をもった仕組み作り、そしてそれらを総合的にプロデュースする人材をもつという案についても話し合いました。



今回はビジョン策定に向けて一区切りとなる市民文化会議でしたが、有意義な話し合いができたという意見と同時に、まだ話し足りないという意見もあり、これからもこのように議論を深めつつ情報交換ができる場所がほしいという意見が非常に多くありました。さらに、このような市民での話し合いの結果がビジョン策定、さらには大町市の未来に具体的に反映されていくことについての期待の大きさをうかがえました。

バラバラと意見を出すところから始まったワークショップでしたが、回を重ねるごとに市民同士が意見を共有し、または発言を考え直し、ぶつかり合って、腹を割った議論ができるようになったといえます。はじめはごく個人的な問題だったことが地域の問題としてとらえられることで改めて多くの人の問題として立ち戻って来て、大町市としての計画、つまり「大町市文化資源活用ビジョン」の必要性やそれに伴う担い手としての「市民」のあり方にまで話が及んだことは大きな前進でした。

アンケートにみる大町市の文化における課題

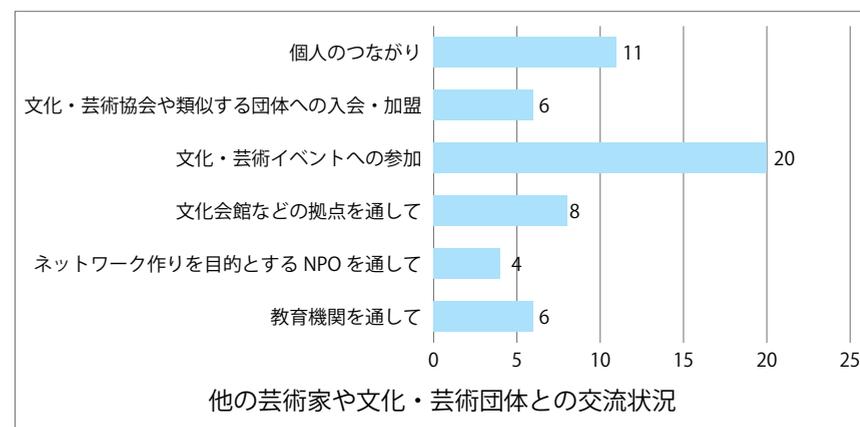
小林ゼミは、大町市でさまざまな文化・芸術活動を行っている大町市民の活動状況と、文化・芸術資源を活用したまちづくりに対する意見等を把握し、ビジョン策定の基礎資料とすることを目的とし、アンケート調査を行いました。本調査は第一回市民文化会議（11月22日実施、参加者41名）で配布・回収し、ウェブでも回答を受け付け、37名の有効回答を得ました。

1. 回答者の内訳

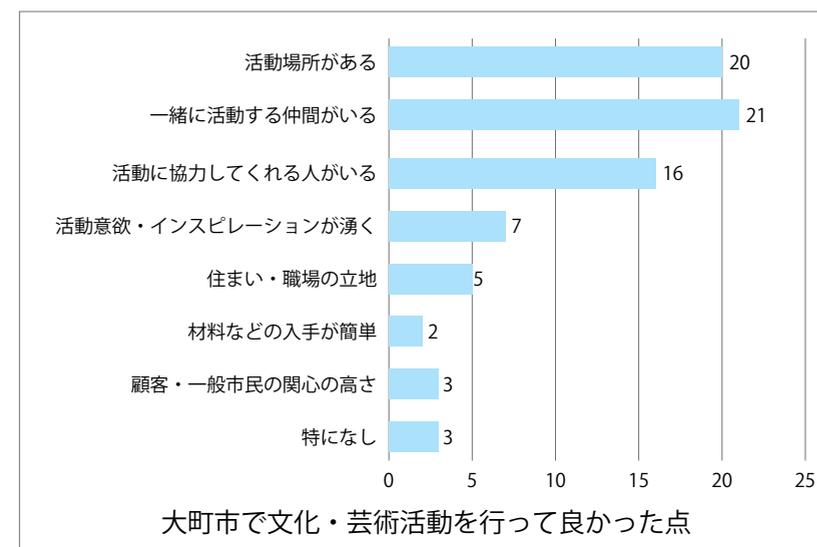
回答者の内訳は、男性17名、女性20名。年齢は、60歳以上が3分の2を占める一方、30代以下は3名（約8%）に留まりました。また職業は自営業が9名と最も多く、アーティストや芸術講師といった芸術関連の職業が目立ちます。次いで無職（6名）、会社員（5名）が多く、無回答10名のうち8名が60才以上（4名が70才以上）でした。回答者の住まいは、大町市（33名）、大北地域（1名）、安曇野市（3名）です。工芸や音楽などの芸術文化、詩吟などの伝統文化、流鏝馬や民話などの地域文化に関わる活動を行う回答者が多数を占め、芸術鑑賞やまちづくりなどの回答も見られました。文化・芸術団体に所属していると回答した人は、27名（73%）、所属していないと回答した人は7名（19%）。所属団体回答者（N=24）の所属団体は、趣味のサークルやグループが規模の大小合わせて15名と最も多く、他にイベントの実行委員会やまちづくり団体、同業者ネットワークなどの回答がありました。文化・芸術活動期間については「10年以上」と回答した人が23名（63%）と最多でした。

2. 他の芸術家や文化・芸術団体との交流状況

回答者32名中26名が他の芸術家や文化・芸術団体との交流があると回答し、その内容（複数回答）は「文化・芸術イベントへの参加」が最も多く、「個人のつながり」が続きます。一方で、「ネットワーク作りを目的とするNPOを通して」や「文化・芸術協会や類似する団体への入会・加盟」や「教育機関を通して」は少なく、横断的な交流の中核となるような組織の不在（あるいは存在しているが利用しない）が見て取れます。

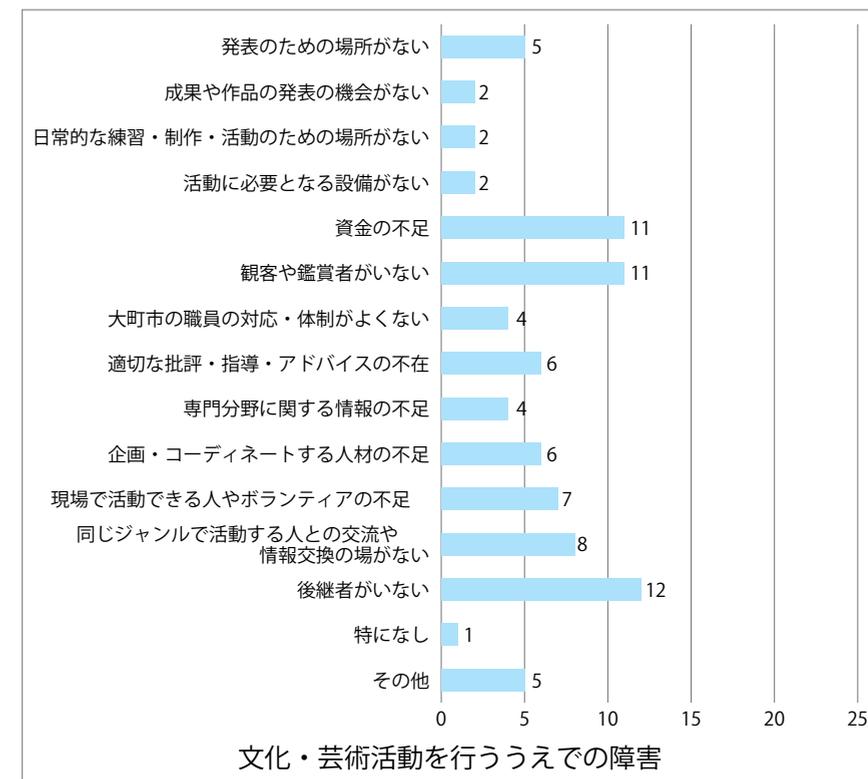


3. 大町市で文化・芸術活動を行って良かった点（回答者31名、複数回答）
大町市で文化・芸術活動を行って良かった点については「一緒に活動をする仲間がいる」、「活動場所がある」、「活動に協力してくれる人がある」には半数以上が頷いています。一方、「活動意欲・インスピレーションが湧く」、「住まい・職場の立地」、「材料などの入手が簡単」、「観客・一般市民の関心の高さ」にマルを付けた人は少数です。



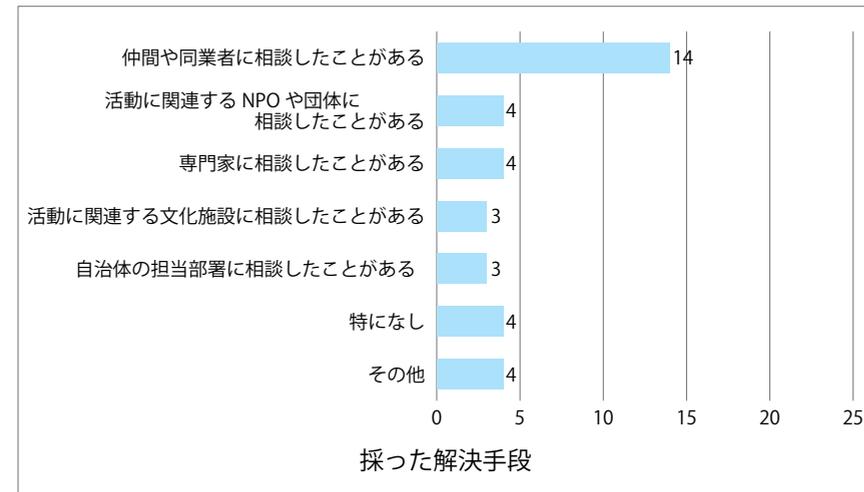
4. 文化・芸術活動を行ううえでの障害（回答者31名、複数回答）

文化・芸術活動を行ううえでの障害としては、約3分の1の人が「後継者がいない」、「資金の不足」、「観客や鑑賞者がいない」に頷いています。一方、あまり障害だと感じられていないものは、「成果や作品の発表の機会がない」、「日常的な練習・制作・活動のための場所がない」、「活動に必要なとなる設備がない」でした。



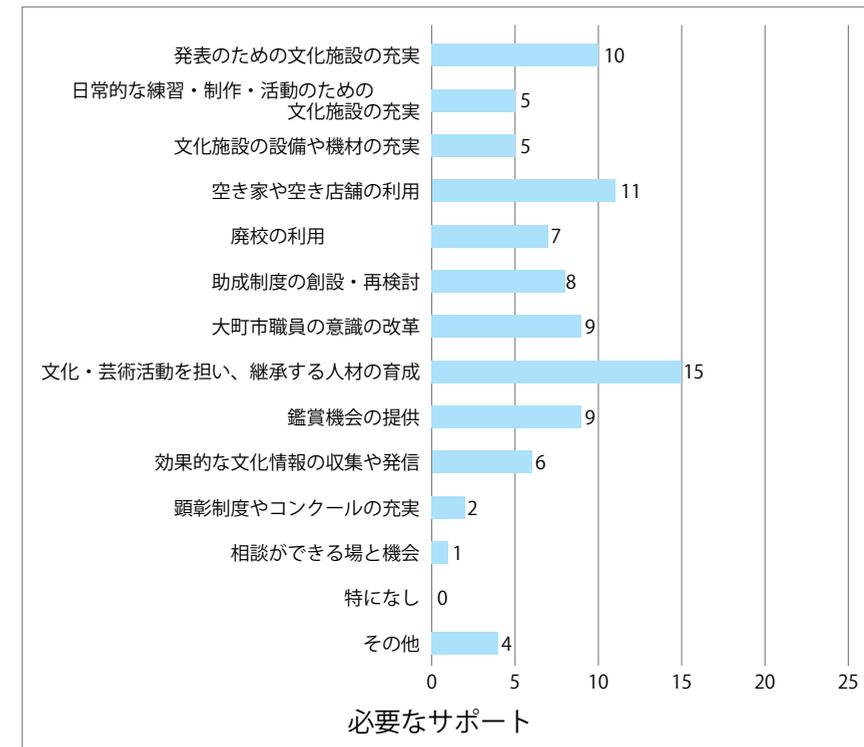
こうした問題を解決するための手段については下の通り（回答者 21 名、複数回答）です。

「仲間や同業者に相談したことがある」人が回答者の 3 分の 2 を占めた一方で、NPO、専門家、文化施設、自治体に相談する人は少なく、項目 2 の横断的な交流の中核となるような組織の不在（あるいは存在しているが利用しない）を裏付けています。



5. 必要なサポート（回答者 30 名、複数回答）

文化・芸術活動の充実のために、特に必要とされているのは、「文化・芸術活動を担い、継承する人材の育成」であり、回答者の半数を占めました。項目 4 に続いて、継承者の育成に対する不安、つまり自分たちの活動の存続に対する不安が強いことがうかがえます。一方で、「相談できる場と機会」を必要とする人は極端に少数です。



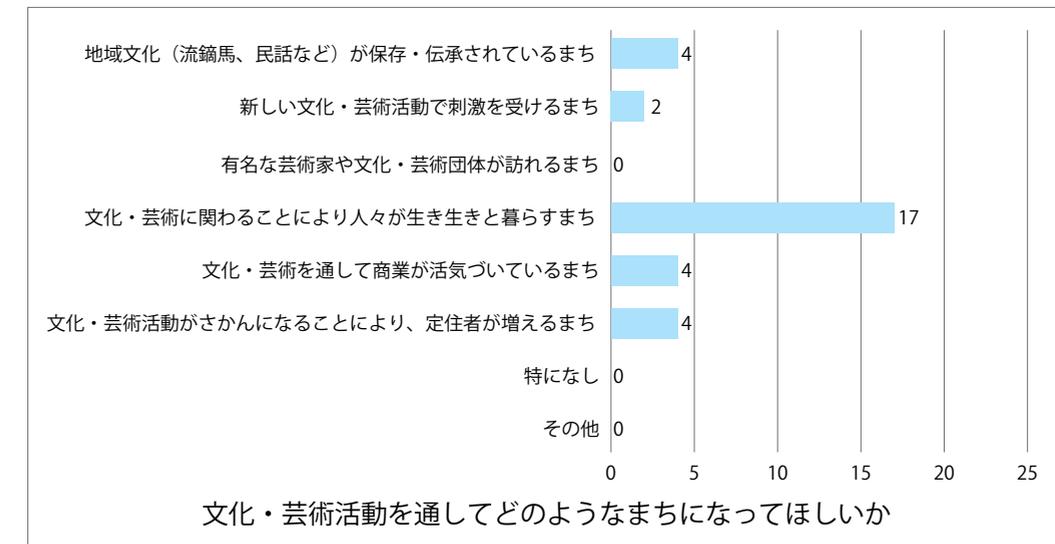
6. 市民による大町市の現状把握

「大町市はどのようなまちだと思うか（回答者 21 名、自由記述）」という問いに対する回答のおおまかな傾向は、次のようなものでした。このような意向を記述した回答者は 11 名です。

- 個別の文化・芸術団体の活動は活発
- しかしそうした活動を行っているのは自分たちのような一部の人々であって多くの人は文化に対する理解がない

こうした現状に加えて、各々の団体の情報発信力が弱く、交流がないとする意見は 6 名に見られました。

続いて、「文化・芸術活動を通してどのようなまちになってほしいか（回答者 31 名、1 つのみ回答）」に対する回答でとりわけ多かったのが「文化・芸術に関わることにより人々が生き生きと暮らすまち」で、「有名な芸術家による質の高い作品や刺激のある新しい文化・芸術作品、人口増加、経済の潤い、地域文化の伝承」についてはさほど求められていないことが分かります。

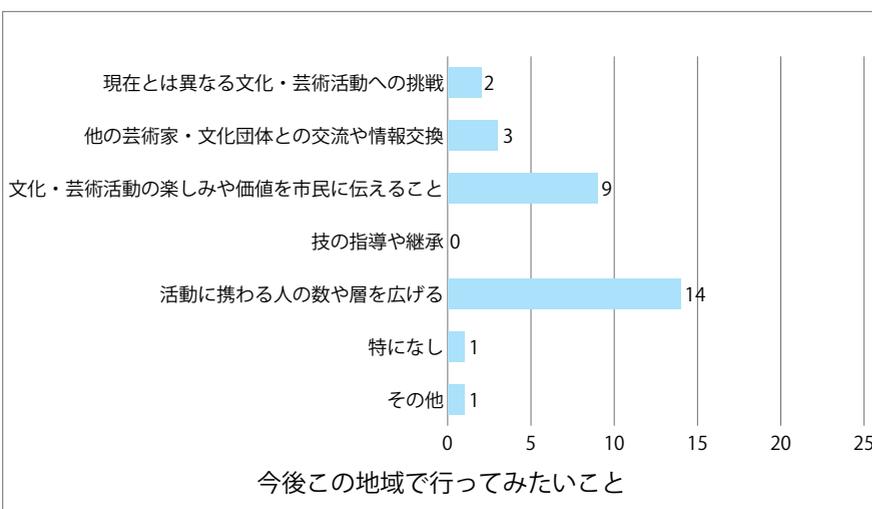


アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。



7. 今後この地域で行ってみたいこと（回答者 30 名、1 つのみ回答）

文化・芸術活動を通じて、今後地域で行ってみたいことについては、「活動に携わる人の数や層を広げる」と「文化・芸術活動の楽しみや価値を市民に伝えること」が多く見られます。一方で、「現在とは異なる文化・芸術活動への挑戦」、「他の芸術家・文化団体との交流や情報交換」、「技の指導や継承」は極端に少数です。他の文化・芸術活動に積極的に関与する姿勢や、文化・芸術の質を高めたり新たな創造を行ったりといった姿勢ではなく、自分の文化・芸術活動を全く知らない人に対してアプローチをしたいという姿勢が見られます。



地域で具体的にできることについては、ワークショップや講座との回答が多く、地域外の人や若い人に情報発信をしたいという志向が強く見て取れます。その背景には、市全体の人口減少や、活動団員数の減少に伴う、活動の存続に対する危機感がうかがえる回答もいくつか見られました。

◆まとめ

1. 活発であるけれども文化・芸術活動が抱えている問題

大町市の文化・芸術活動環境について、練習・制作・活動のための場所や設備、発表の機会はある程度十分に存在しており（項目 3、4）、個別の文化・芸術団体の活動は活発である（項目 6）ことが分かります。一方で、観客・一般市民の関心が低い（項目 3、4）、意識が低く価値観が違う（自由記述）とする回答が目立ったことから、多くの大町市民が自分たちの活動に関心をもたず、理解が得られないことが大きな障害であると感じている回答者が多かったといえます。また、イベント等の広報がうまくないとする意見もあり、これが魅力を伝えられない一因とも感じられています。

大町市で文化・芸術活動を行う際の以上の問題について、根本的な原因はどこにあるのでしょうか。活動を行う環境と発表の機会には恵まれているものの、広報がうまくいっていないために観客・一般市民に発表の情報が伝わっていないのか。あるいは情報として伝わってはいるものの、回答者が魅力的であると感じている活動が観客・一般市民には魅力的に映っていないということも考えられます。このことから、観客・一

般市民に関心が欠けているとする以前に、自分の文化・芸術活動の魅力を十分に伝えられていないことが理解を得られない理由として指摘できます。後継者の不足（項目 4、5）もこれに起因する可能性が高く、活動の魅力や価値を人々に説明し理解してもらう努力を重ねることが重要な課題です。

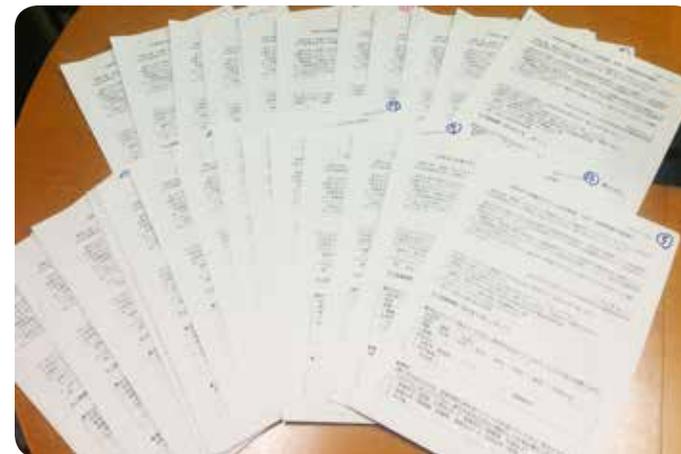
2. 文化・芸術活動に何が必要か

交流については、各々の団体の情報発信力が弱く交流がない、企画・コーディネートする人材が不足している、との回答が少なくありません。横断的な交流の中核となるような組織の不在（あるいは存在しているが利用しない）を指摘（項目 2、4）しましたが、全体としての割合は多いとはいええないものの、こうした組織や人材が求められていることが分かります。ただし「相談できる場と機会」を必要とする回答者が極端に少なかった（項目 5）ように、ここで求められているのは、自らが個別に相談しに行って解決策を練るものでなく、全体を統括して交流促進や情報発信をしてくれるような組織であるといえるでしょう。

交流の中核となる組織を望む回答者の割合が少ないだけでなく、自分自身が交流したいかというところにさらにその割合が少ない（項目 7）ことが分かります。有名な芸術家による質の高い作品や刺激のある新しい文化・芸術作品がさほど求められていないことから、文化・芸術に縁遠い市民だけでなく、文化・芸術活動を行っている回答者自身、自分と異なる文化・芸術ジャンルにはさほど関心を持っていない可能性が指摘できます。また、回答者が交流を望んでいる対象は、現在文化・芸術活動に携わっ

ている者ではなく、そうした活動をほとんど行っていない市民です。

後継者の不足に関する意識の強さが度々（項目 4、5）見られました。以上を総じて考えると、交流を望む際、団体や活動を人員の面で存続させることに重きが置かれ、団体のなかで培われた文化そのものの継承はさほど意識されていません。



大町市の文化行政 はじまりの第一歩

ー行政と市民協働による文化資源活用ビジョン策定へー

大町市と市民がつくる「活用ビジョン」という初の試み

大町市文化資源活用ビジョンは、行政と市民との協働によって生まれます。このたびのビジョン策定に向けて、大町市は一つひとつの過程を大切に、市民のためのビジョンへと結実するように、行政職員、策定委員、一般の市民の方々が直接に集まり、話し合う場所を設けました。そこでは、大町市の文化資源とは何か、それを活用するとはどのようなことか、活用に必要なものは何かについて、一から話し合い、ビジョンの方向を決めていきます。その工程の一つが、10名の策定委員による「策定委員会」、もう一つが、誰でも参加できる「市民文化会議」です。

策定委員が大町市の「自立」を指摘

策定委員会では、大町市民の中から公募で選出された市民2名を含む10名の策定委員が集い、大町市文化資源活用ビジョン策定に向けた協議が行われました。第1回策定委員会において、委員長に選出された水久保節氏（大糸タイムス株式会社）からは、大町市の特徴として「山の恵みである水から波及したさまざまな文化」と、今後目指すべき方向性として大町市の「自立」ということが指摘されました。そして、それぞれ異なる文化、文化・芸術活動の価値を認め、それらが大町市の発展につながるような仕組みづくりが必要であることが確認されました。

市民文化会議とアンケートにみる文化活動の問題

以上のような大きい方向性が示された上で、実効性のあるビジョンとするために、大町市では、これまでに文化資源に関して市民の生の声を聞くために3回の市民文化会議の開催と、さらに、文化・芸術活動の実態を明らかにするためのアンケート調査が実施されました。市民文化会議では、「大町の文化資源」「課題」「解決」を話し合いました。アンケート調査は、大町市で活動してきている文化・芸術団体および個人を中心的な対象として、文化・芸術団体の活動状況や、大町市で活動を行っていく上での課題をめぐり実態調査を行いました。

その結果、市民文化会議、アンケート調査のどちらでも、市全体の人口減少や、文化・芸術活動に携わる者の減少に伴う、活動の存続に対する危機感がうかがえました。そのような背景もあり、アンケート調査において、



文化・芸術活動を通して行っていきたいことを尋ねる質問に対しては、「活動に携わる人の数や層を広げる」と「文化・芸術活動の楽しみや価値を市民に伝えること」という、自分たち以外の人や若い人に文化・芸術活動について伝えたいという思いが強くみられたと考えられます。

特に、2回目以降の市民文化会議では、大町の文化・芸術活動を行っていく上での課題について話し合い、異なる活動を行ってきた個人ごとに、場、資金、活動人数の問題など、多岐にわたる課題が提出されました。そのような中で、市民の間からも、文化・芸術活動に関して指摘された課題群を見わたし、課題を解決するためにビジョンが必要なのではないかという意識が強く共有されていきました。第3回市民文化会議では、これまでに特定の文化・芸術活動にとっては、発表や制作にふさわしい場所がなかったこと、自分たちが主体となっていくことのできるような環境づくりが必要であると話し合われました。

その一方で、アンケート調査からは、大町市民が、大町市で文化・芸術活動を行ってよかった理由に関して、半数以上の回答者が一緒に活動し、活動に協力してくれる人とのつながり、活動の場があることをあげていることも明らかとなりました。



ビジョンに求められる「文化資源」「課題」「役割」の可視化

多くの個人がそのようなつながりや、場所に恵まれていることを感じているにもかかわらず、後継者、資金に関しては課題を抱えていることから、アーツ・マネジメント機能を持った場所、文化固有の問題を解決するために動ける人材を育成することが重要であることが確認されました。

これまでの取り組みの結果から、大町市文化資源活用ビジョンでは、文化・芸術活動団体という文化資源を見据えた上で、現状の課題をとらえ、「行政」「文化・芸術団体」「市民」が果たすべき役割を定めることが求められます。そして、ビジョンのなかに、大町市の文化資源の活用を担っていきけるリーダーを育成するために必要となる仕組みを示すことが必要となってくるはずです。

大町市文化資源活用ビジョン 試案

この大町市文化資源活用ビジョン試案は、第一には、大町市役所の文化振興の方針と方法を定め、第二には、その運用にあたって重要な役割を担う市民、中間支援的組織、行政、そして文化・芸術団体の役割を明確にし、そして第三には、これら全体の運用が継続的に行われるための仕組みの試案としてここに提案するものです。

1. 文化資源活用のためのプロセス（手順）と仕組み

大町市の文化の主役は、住民一人ひとりです。大町市には、自然を愛でる心性、伝統、歴史、産業遺産等、モノやコトまでを含む多様な文化が存在しています。それは私たちの日常にあまりにも普通に存在していて、意識することもなく、場合によっては目で見ることができない生活文化とも言えます。その文化を、大町市と市民が精神的にも、社会的にも、そして経済的にも豊かになっていくために活用するという視点で見直した時に、それらは文化資源となります。その当たり前のように思われて意識もされていないかもしれない文化を文化資源として活かすためには、住民一人ひとりが気づきや関心をもつことが重要です。そこで、文化資源活用ビジョンを考える時には「気づく」「知る」「活かす」という3つのキーワードが大切になってきます。この3つのキーワードの先に、新しい大町市の在り方が見えてきます。



大町市において文化資源とみなすことができること（第1回市民文化会議より）

〈気づく〉〈知る〉〈活かす〉がキーワードになります

〈気づく〉

大町市の文化資源に気づく。

これは、まず住民一人ひとりが、大町市内の文化、人、新しい価値観を見つけ出すことです。さらに、すでにある文化、芸術、歴史、伝統、産業遺産、町並みや文化活動を他の人に知ってもらおうように見えるようにすることを意味します。

〈知る〉

大町市の文化資源を知る。

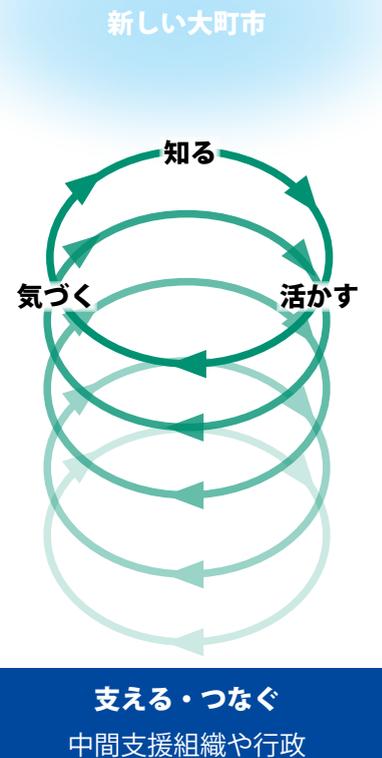
活用できる文化資源を気づいたら、住民一人ひとりがお互いの活動について知り合う、共有します。そのことにより新しい文化芸術の存在や価値を知ることを意味します。

〈活かす〉

活かした先に、新しい価値観で、変化した自分自身や大町市に気づきます。

支える・つなぐ

「気づく」「知る」「活かす」というサイクルがうまく循環するためには、中間支援組織や行政がそれぞれの得意分野において支援を行うことが必要になります。この循環の先に、新しい価値観によって変化した住民や大町市が存在します。



2. 文化資源を活用する具体的な展開とアクター(住民、企業、中間支援組織、行政)

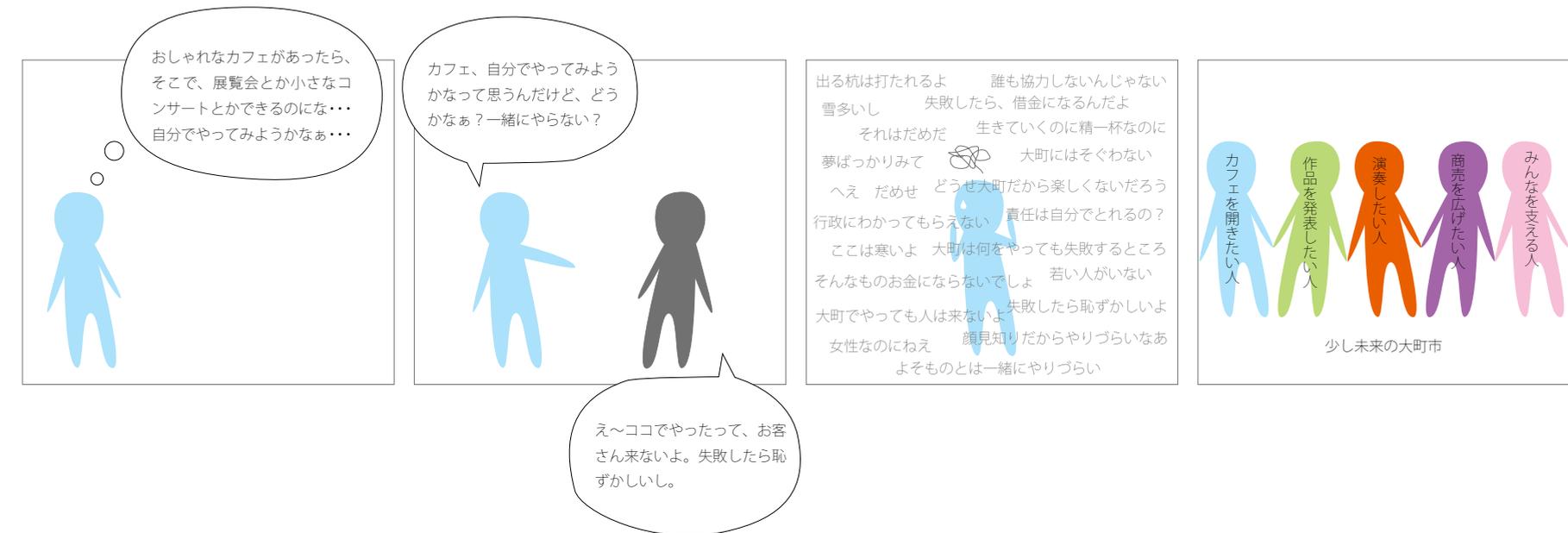
市民文化会議で行われたワークショップや文化・芸術団体、個人に向けて行われたアンケートにおいて、文化資源とみなすことができるものが大町市には多く存在することがわかりました。また市民の自主的な文化活動も盛んに行われています。大町市の文化形成において、企業等の民間活動も重要な役割を担ってきました。しかし、これらの活動をより活発にして発展的に展開していくために情報を共有し、活動の行き詰まりを相談・解決・展開していくような、調整をする場や人、そして情報が存在していません。あったとしてもこれらの問題を解決するには活用されていない状況にあります。

このような問題を解決していくことが文化資源を活用するための環境整備となり、主要な部分については行政の役割となります。ただし、環境整備が行われた上で、それらを動かしていく人や組織については、文化は自主的な活動であること、また長期的に展開していく必要があることから、行政は機動性や柔軟性をもって動けないという問題もあります。そうしたことから市民と行政の間に立って活動できる、公共的役割を担うアーツ・マネジメントの専門性をもった中間支援組織の存在が必要となってきます。

3. ビジョンの構成

地域の文化資源に「気づき」、それらを深く「知り」、「活用」の道を「芸術や文化」を通じて拓くことによって少し先の大町市の未来が展開していきます。この循環を支えるために、行政・中間支援組織がありますが、それらの人材や組織を行政内部と行政外部で育成していくことも、重要な環境整備であり、スケジュールを決めて実施することによって、より実効性のあるビジョンになります。その際に記述する必要がある内容として(1)目標、(2)施策の内容、(3)担い手の役割、(4)計画実行の仕組み・機関(中間支援組織)、(5)スケジュールと評価があげられます。現在、まだ大町市において中間支援組織が形成されていないことから、それらの整備も含めて中長期的な実施のスケジュールでビジョンを実施していく必要があります。

大町市で「つながる」ってどういうこと？



大町市での取り組みをより多くの人に

(1) 展示「ばもす！おおまちー文化資源活用ビジョンにの策定に向けてー」

期間：2015年3月16日（月）～2015年3月27日（金）

場所：大町市役所本庁舎1階市民ホール

2012年度に大町市と小林ゼミのプロジェクトが始まって3年が経とうとしています。大町市に新たな動きが生まれてきました。2015年3月の大町市役所における展示では、この3年間の地域文化コーディネーター派遣モデル事業のあゆみとその成果を明らかにし、広く大町の市民にこれまでの取り組みを共有してもらうことを目指しました。また、大町市の文化資源としての「大町エネルギー博物館」の活用方法を提案する展示も同時開催しました。

◆「ばもす！おおまちー文化資源活用ビジョンにの策定に向けてー」展示内容

パネル① What's going on?

2014年から2015年の活動の流れを紹介しました。特に2014年10月からは「大町冬期芸術大学」の実施と「大町市文化資源活用ビジョン」の策定に至る背景を確認することで、大町市の少し先の未来を考えるきっかけにしたいと考えました。

パネル② おおまちの文化を咲かせよう

パネル②では、これまでにゼミ生が気づいた大町市における「文化資源」を示した上で、展示を見に来た市民の方々が自分の考える「文化資源」を書き加えていくことでこのパネルを完成させていくかたちにしました。大町市のシンボルの一つであるオオヤマザクラが花開くように、パネルに彩りを加えてもらいました。

パネル③ 市民と行政の役割分担

パネル③では、愛知県武豊町の町民会館「ゆめたろうプラザ」を事例に、地域の文化振興における、市民と行政の役割を探り、そこにおける中間支援組織の存在とその意義を示しました。

パネル④ 人材育成

パネル④では、2014年度の「大町冬期芸術大学」の取り組みを紹介しました。「大町冬期芸術大学」が目指すところは、これから大町市において文化資源を活用していける人材を育てていくことであり、人材育成だけでなく、これから大町市でプロとして活動し続ける人々の可能性も探りました。

パネル⑤ 大町市文化資源活用ビジョン

パネル⑤では、本展のメインテーマである「大町市文化資源活用ビジョン」を考えていきました。大町市において文化振興を継続的に行うための仕組みの必要性について提示を試みました。

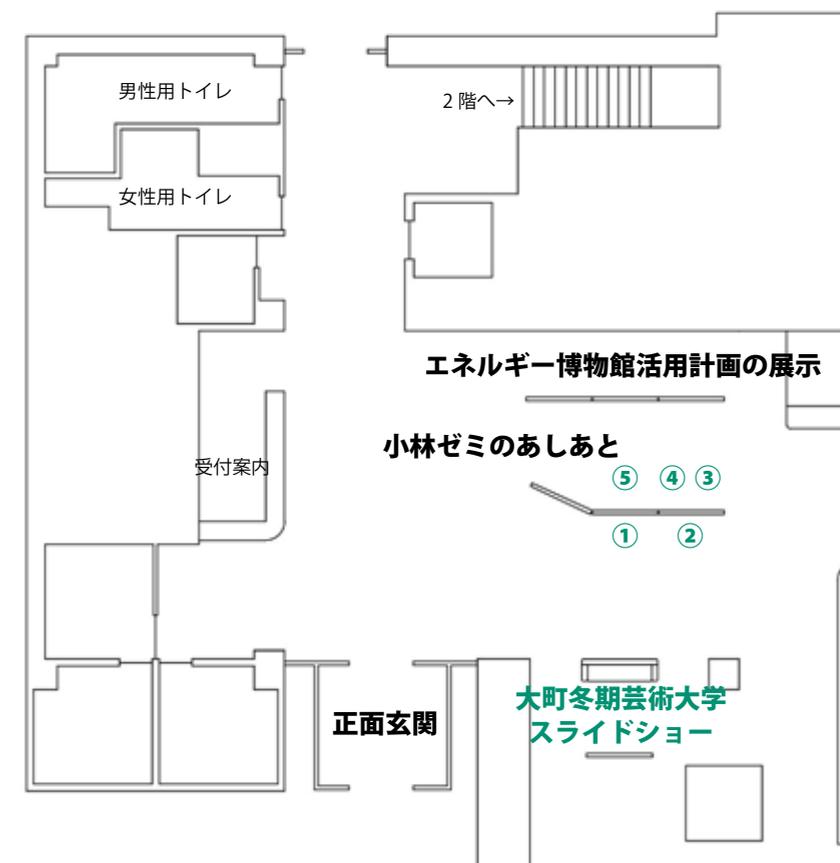
◆エネルギー博物館活用計画の展示内容

小林ゼミではかねてより「大町エネルギー博物館」を大町市の重要な文化資源であると考えてきました。そこで「大町市文化資源活用ビジョン」の一例としてエネルギー博物館を取りあげました。1枚目のパネルではエネルギー博物館の概要をふまえた上で、ミッション設定の意義とそこにプラスした方がよい要素を提案し、続く2～3枚目のパネルでは公益財団法人の利点を活かした運営、多様な主体とつながる手がかりを提示しました。4枚目のパネルでは地域の強みを活かした参加型展示を私たちが発案し、5枚目のパネルではここ数年来エネルギー博物館が少しずつ改善を重ね活動を広げてきた事業内容を紹介しました。

この展示では、たとえ巨額の博物館リニューアル費用が無かったとしても運営の工夫によって文化施設の再生が図れることの可能性を、エネルギー博物館活用の再考を通じて提示しました。その可能性はエネルギー博物館だけではなく、全国の活用されない文化施設を運営によって再生していくことにも通じていくと私たちは考えました。

◆小林ゼミのあしあと

ここではそもそもなぜ東京を拠点にする小林ゼミが大町市で活動してきたのかを明らかにしました。3年の間に挑戦と失敗を繰り返しながら、小林ゼミは市職員や市民、アーティストと協力しながら大町市に適した取り組みを探ってきました。



展示会場案内図（大町市役所本庁舎1階）

大町市での取り組みをより多くの人に

(2) 小林ゼミによる広報活動

地方自治体が文化政策やまちづくりを行う上で、広報が重要であることは言うまでもありません。広報は英語（PR =パブリック・リレーションズ）の訳語ですが、単なるお知らせとは異なり、「社会の人々とのよりよい関係づくりを目指して行うさまざまな活動」を指す言葉です。しかし、日本において、広報は、一方的な情報提供や商業的な宣伝といったイメージがあります。大町市においても同様で、市の発信する文化に関する情報が必ずしも市民の求めるものとなっていない、広報が市民との対話型となっていないなどの問題点がありました。そのため、たとえば大町市内で行われている文化的な催しがあるにもかかわらず、市民にその情報が充分に行きわたらないなどの状況が見受けられました。

現在一般的に、行政における広報の知識やスキルは不足していると認識されながらも、その改善への意識や行動が起こりにくいということが指摘されてきています。そこで、小林ゼミでは、2014年12月より、ニュースレター「ばもす！おおまち」とfacebookページ「大町冬期芸術大学」を活用して、広報活動を実験的に行うこととしました。小林ゼミには文系理系の学部出身者、社会人大学院生も所属しており、ゼミ生は編集・デザイン等に関してさまざまなスキルや経験をもっています。ゼミではそうした人材を最大限に活かし、市行政とは別の団体が広報を行うことで職員の負担を軽減するとともに、これまでの広報とは違った視点で事業に関する情

報を提供することができるのではないかと考えました。

基本的には、紙媒体で発行するニュースレター「ばもす！おおまち」で情報が直に手元に届くようにし、さらにウェブ上でもいつでも閲覧できるようfacebookで補完するという体制を取りました。紙面は情報を整理されたかたちで提示できる一方、ウェブは即時発信が可能で更新頻度が高いという特性があることから決定した方針です。今回の小林ゼミによる広報活動は、広報の本質をはっきりとさせて分かち合うことを目指しました。私たちの考える広報の本質とは「市民からの信頼感の向上」、「行政と市民の共有感の向上」、「大町市の『まち』としての存在感の向上」の3点です。

市内で起きていることや行政のやっていることについて、あらゆる市民に知ってもらうことはほぼ不可能です。しかし、広報活動をルーティンで行うのではなく、毎回目的や方向性を定めた上で行き、受け取る側の市民の生活の中に定着させていくことがその確実な積み重ねとなっていきます。

◆ニュースレター「ばもす！おおまち」

「ばもす！おおまち」は、大町市の文化や芸術に関する話題を市民の間で共有することを目的として作られたニュースレターです。「ばもす！」とは、ポルトガル語の「Vamos! (行こう！／やろう！)」という意味であり、文化や芸術の力によって大町がより豊かに、より明るくなることを願って名づけられました。2014年12月1日発行の「大町冬期芸術大学特別号」を皮切りに、2015年1月1日に正式な創刊号が発行され、以降、月刊のニュースレターとして、市民に配布・回覧されています。中心的な話題は、大町市が取り組む二つの文化プロジェクト「大町冬期芸術大学」開講、「大町市文化資源活用ビジョン」策定です。これらのプロジェクトはどのようなものであって、どのように市民と関わっているか、現在何に取り組んでいるかなど、市民と行政の協働によって変わろうとしている大町市の今を肌で感じられる媒体を目指しています。



◆広報班によるfacebook運用

facebookページ「大町冬期芸術大学」は、2014年10月23日に投稿を開始しました。市民の理解を促進していくことを目標に、大町冬期芸術大学の成果発表や市民文化会議の告知、大町冬期芸術大学や市民文化会議の開催の様子の報告などの発信を行いつつ、全戸配布・回覧の「ばもす！おおまち」をより地域外に発信するためのPDF掲載、関連した活動を行う大町市の団体「マチサラ」の「信濃大町 youth サミット」紹介などの広報活動を進めました。

2014年12月には大町冬期芸術大学の企画プロデュースコースの広報班が結成されたため、1月以降は冬期芸術大学の進展について、企画プロデュースコース広報班による投稿も同一アカウント内で開始されました。

このfacebookによる発信は、同一アカウントを用いて学生、教員、大町冬期芸術大学受講者の三つの立場から行っていたため、どのような立場からの発信であるかについて、情報の受け手に混乱が生じる懸念がありました。そこで各記事の最後に学生の場合は「ゼミ生〇〇」、冬期芸術大学受講者の場合は「企画プロデュースコース〇〇」、その他の場合は特に肩書を表記しない、という署名を入れることでそれぞれの立場を明確に示すことにしました。



大町市 文化と行政の今までとこれから

大町冬期芸術大学に思う

平成 24 年 3 月に牛越市長から文化芸術の振興による町づくりに取り組んでみたいので、一緒に研究してほしいとの指示があり、4 月の市長上京の際に財団法人地域創造へ同行訪問させていただいたのが、今回の事業導入のきっかけです。

それ以来、小林先生には、コーディネーターとして関わっていただき、市内における文化資源の調査に始まり、庁内での人材発掘、養成の取り組みや市民に向けての意識啓発など精力的に取り組んでいただいております。

時を同じくして、市民の中に自主的な動きとして、文化資源の発掘や活用によって市域の活性化を目指す「大町ラボラトリ」の活動や、世界的に著名なアーティストのコンサート開催による当市の知名度アップや文化芸術の向上に向けての活動などが積極的に展開されるようになってきています。これらの諸活動は従前から言われてきた、当市には素晴らしい自然や歴史、文化等の資源、近代資産がありながら十分に活用できていないという状況からの脱却を多くの市民が真剣に考えて行動を始めた状況になったとすることができます。

今回の大町冬期芸術大学の取り組みは、従来あまり行政に関わりがなかった方々の参加が多く見受けられます。当市の文化を幅広く支える人材の発掘ができたことを感謝しています。現在策定中の大町市文化資源活用ビジョンにもとづき、大町の素晴らしいさを多くの市民の間で共有し、多くの市民が外に向かって積極的に発信を始めることが重要です。

この 3 年間の取り組みで、市民の間に芸術文化の振興を通じて、地域の元気回復や活性化に向けての取り組みが顕在化しており、さらに市民と行政の協働の力によって新たな「文化都市おおまち」の創造に向けて取り組んでいきたいと考えています。

大町市教育次長 橋井弘治



これからの行政の役割

平成 25 年度からこの事業に関わることになりました。最初は、文化行政を社会教育施設の運営ととらえていたので 話もかみ合わず、頭の中は？マークが飛び交っていましたが、地域創造の研修でフランスのナント市の事例などに触れて、世界的な文化戦略の流れを知り、出来れば大町でも早い時期にこんなことが出来れば素晴らしいなと思いました。

大町市では、「食とアートの廻廊」や「原始感覚美術祭」などの美術系、「カシマツリ」などの音楽系などさまざまな活動が市民団体主催で開催されており、市民の新しい力が育っていることを感じます。これらの方々とのつながりをもつ中で、また、今回の大町冬期芸術大学を開催する中で、これからの私たちの仕事は、市民団体が中心となって実施、計画してきたものについて、あくまでも裏方としてバックアップし市民団体が力をつけていくことを育てていくことだと感じました。

大町市文化資源活用ビジョンの策定により、私の思いもより達成しやすくなっていけばよいと願っています。

生涯学習課長 澤口千央美



外部へ波及していく活動へ

私は平成 26 年 10 月からの関わりですので、大町冬期芸術大学について感想を述べたいと思います。大町冬期芸術大学の創作舞台は盛大かつ非常に濃い内容で開催することができました。各コースの先生方、大変ありがとうございました。先生方のご指導、お力添えにより、それぞれの受講生が刺激を受け、成果発表に向けて一丸となって、自分たちで学び、考え、行動し、日々着実に上達し、素晴らしい成果発表パフォーマンスを作りあげることができたと思います。本番は残念ながら駐車場係等で見ることはできませんでしたが、稽古の様子を見て、私個人としては、意外と嫌いじゃない内容でありました。

今回の事業は大がかりな公民館講座であったと考えています。引き続き、特色ある文化芸術の場を設けるのはもちろんですが、学習活動から発展して、外部へ波及していく活動へどのようにつなげていくかが課題だと思います。皆様大変お疲れ様でございました。これからは始まりです。今後ともよろしく願っています。

生涯学習課 勝野 実



市民と行政が創る文化・芸術のまち

平成 26 年度より当事業の担当として関わらせていただき、地域の素晴らしい文化資源を体系づけ、市民と行政が協働しながら文化・芸術のまちづくりを推進していくための指針である「大町市文化資源活用ビジョン」の策定とそれを担う人材発掘・育成を目的とした「大町冬期芸術大学」を実施してきました。（改行一字下げ）ビジョン策定を通じて市民の活動内容や想いを深く知ることができ、また大町冬期芸術大学の実施により、普段つながることの無い市民同士や行政と一緒に一つ一つのものを創り上げる場に携わることができたことは私にとって大変貴重な経験でした。

市民が地域の文化を再認識し誇りをもてる社会にするためにも、当事業は意義のあるものと考えますが、小林真理先生をはじめゼミ生の方々が長期にわたり当事業意識を強くもって積極的に関わっていただいたからこそ実施可能なものです。改めて心より感謝するとともに、今後も引き続き貴重で率直な意見をいただきたいと思ひます。

生涯学習課 清水智之



大町市の新たな第一歩

初年度からこの事業に関わらせていただき、どのような事業なのか、何をすればいいのか、漠然と「文化・芸術でおおまちを活性化」という具体性のないワードだけが頭を駆け巡る中、多くの職員を巻き込んだ取り組みに動揺と少しの期待感がありました。

また、はじめは庁内の職員にも理解が得られず、自分のやっていることが正しいのか、よく分からなくなりました。さらに、市職としての発言と、個人としての気持ちの葛藤もあり、平成 26 年度当初は不安しかありませんでした。しかし、小林真理准教授はじめゼミ生の皆さんからの大変心強い後押しもあり、自分の意見を伝え、今年度事業を実行に移すことができたのだと思います。

ゼロからスタートした大町冬期芸術大学を終えた今、大町市の新たな第一歩に関われたこと、大町市のために大変多くの方が協力してくれたこと、社会人として学ぶべきこと以上のことを多くの方から教えていただけたことに大変感謝しております。

生涯学習課 北澤恵美



市職員若手ワーキンググループー市職員と市団体との交流 まちに広がっていく活動ー

初年度（2011 年度）は、大町市の人材育成という観点から、大町市についての思いや考えていることなどを市の若手職員を中心に共有し、8 つのグループに分かれ研修を積み重ねてきました。

研修の発表会では、各グループの個性ある提案や、市民団体からの発表がなされ、市職員と市民団体との関わりを作るきっかけとなり、大変意義のある会となりました。

次年度からは若手職員で提案した企画を実行に移せないかと、有志での集まり「マチサラ（マチ＝大町、サラ＝～ごと）」が始まり、コーディネーターの小林真理准教授にご助言いただきながら市内各所で会議を積み重ね、耕作放棄地の有効利用やふれあい事業の拡充のためにヤギの放牧を開始することとなりました。

一方、その年の職員提案では「おおまち若者会議の開催」が提案され、採用はされなかったものの、若者会議開催に向けて、有志で活動が始まっていました。

上記 2 つは別の団体の活動ではありませんでしたが、相互に連携協力し、これらの活動団体をマチサラ実行委員会と総称し、2014 年 12 月に開催した信濃大町 youth サミットでは 80 人以上の若者が集まり、新たな出会いの場となりました。

また、関連事業として鹿追い体験や北川フラム塾への参加も行いましたが、このような活動を続けることで、市民団体との関わりや、新たなつながりを広げるきっかけになり、大町市では市職員だけでなく、市民が主体となった今までにない活動がたくさん生まれています。

おわりに

文化資源活用ビジョン策定後の課題について

大町冬期芸術大学は、大町市文化資源活用ビジョンが策定された後のことを考えて立ち上げた事業です。文化資源活用ビジョンが策定されたとしたら、それを実効的に具現化していくのは行政の役割になっていきます。しかしながら、一般的に公共政策の分野において、行政が得意な部分と比較的苦手な部分があり、後者については放っておくと何もされないまま放置されてしまうことが往々にしてあります。文化資源を活用して地域の文化振興を行いながら地域の活力をもたらそうとする試みは、おそらく担当職員の企画力と実行力、調整力が大いなものと言う領域だと言ってよいと思います。

しかし、行政の文化行政担当者ができる範囲も限られています。日本の他の地域においても、より専門的な部分については各ジャンルの担当者が担ってきました。たとえば、狭い意味での文化・芸術振興の分野において、美術館や博物館でいえば、その施設の専門性を活かすことができる学芸員がいます。図書館にも住民に対するレファレンスサービスを提供できる司書がいます。文化会館や文化ホールにおいてはアートマネージャーという人たちが必要であることが2012年に成立した法律の中でも明らかにされました。彼らはいずれもそれぞれの施設を拠点に、それぞれのジャンルの特性を活かして、地域に向けて、地域の文化的な豊かさを継承したり、育んだり、伝えたり、刺激していく人たちです。

それでは施設にとらわれない、もっと広い意味で文化・芸術分野を視野に入れていく、ジャンル横断的な活動を視野に入れていくとしたら（おそ

らく「大町市文化資源活用ビジョン」はそうなるでしょう）、単なる施設管理だけでなく、個別のジャンルの専門性を活かすだけではない、専門性に狭くとらわれることなく地域に眠る文化的潜在力や文化的必要を引き出す能力が求められてきています。それを今後、大町市の中で誰が担うのかという問題が必ず立ち現れてくるのです。

地域で担う

もちろん行政が直接担当するということもありうると思います。しかし、異動が多い行政職員だと、せっかくスキルを身につけても数年後に異動ということになり継続性が担保されません。また外部から専門家を呼んでくることも可能ですし、手っ取り早い選択かもしれません。しかしながら、大町市に愛着を持ち、大町市で文化資源活用ビジョンの達成に力を尽くしたいと考えている人がスキルアップし、他地域とネットワークを作りながら自分たちの弱いところを補強していく方が適切に思えます。あえて、大町冬期芸術大学を「大学」と名付けたのは、もちろん100年近く続く信濃木崎夏期大学にあやかりたいという意識が大いにありますが、この事業が一回限りで終わるのではなく、段階を踏んで専門性のレベルを上げていくことにより市民主導でいずれは行政と対等のパートナーとなる組織を生み出す事業になることを目指したいからです。

実はこの事業、大町市には「おしゃれで、カッコいいところがないから、ファッションショーをやるのがいいのではないか」と発案した若手の職員さんの発想からヒントを得ました。「おしゃれでカッコいい」ことは、一

回限りであれば、東京からおしゃれでカッコいい人たちを呼んでくれます。継続的に大町市で「おしゃれでカッコいい」ことが行われるためには、それができる人が大町市にいないと、いつまでたっても消費するだけの地域で終わってしまいます。

また、ファッションショーそれ自体もヒントになりました。ファッションショーは、さまざまな芸術ジャンル（身体表現、空間美術、ファッション）が協働して成り立つパフォーマンスであり、さまざまなジャンルを講座として立ち上げることができること、これらのジャンルには優れたアーティストがいること、そして大町市であまり盛んではなさそうなものも取り入れられると思いました。さらにこれらを総合させることを考えることは、協働することの難しさを含みながら成果発表にまで結びつけていくことになるはずであり、地域をプロデュースしていく上で非常に重要な体験となり、格好の題材になると考えました。文化や芸術は、非常に個別的、地域的、独自のであると同時に、普遍的なものを追求していく領域であり、それらのせめぎ合い（今風にいえば「交流」）こそ、文化・芸術の発展の重要な要素です。

市民が担う

ここまで書いてきた通り、これまで自治体は文化振興というものを、文化施設を建設し、それを住民に使ってもらうことでサービスを提供したと考えてきました。ハードからソフトへということが言われるようになりましたが、そのソフトを誰が作り出していくのかということこそ目が向け



られていくことになるかと思います。財政的にゆとりがあった時代は、自治体が財団等を設立して、その任務を担ってきたところもあります。しかしながら、いまは専門的なスキルを身につけたNPOがそれを担うところも出てきました。市民が力をつければ、十分に地域の文化振興の担い手となりうるのです。大学は4年で1サイクルです。大学院の修士レベルまで考えれば、1サイクルが6年ということになります。時間がかかるようですが、継続して人が育ち、地域に豊かな経験をもたらしたいと考えている人たちが文化振興の重要な部分に携われば地域は必ず変化していくはずですよ。

2015年度、大町市は新しく文化振興を担う係を創設することになりました。これが大きな一歩になるのかは長期的な継続と適正な評価こそが重要になります。

小林ゼミのあしあと

2012年度から始まった「大町プロジェクト」には、出身学部、所属学科、職歴、年齢、国籍もさまざまなゼミ生たちが関わってきました。

「文化政策」の研究を基礎に、地域における人と人とのよりよい関係を現場で模索するゼミ活動は、グループワークを中心に進められてきました。自分とは違う意見や方針に耳を傾け、協議し、統合していくグループワークの過程は決して楽なものではありません。しかし、そういった試行錯誤があればこそゼミ生の多様性が反映されて、個々人ではたどり着けないような見解が開けてくることも多かったといえます。

そして自分たちの見解が果たして適切なものであるのかどうかを教えてくれるのが、現場での体験でした。大町市との活動から教えられ、ゼミに持ち帰って考え、その結果をまた大町市に投げかける、そのような作業の繰り返しの中で、少しでも大町市に貢献できることがあればよいと願いつつ、私たちはゼミ活動をしてきました。

「文化政策」の研究や現場を志す者たちにとって、大町市での本事業に携わった経験は大きな糧であり、その成果を多方面に波及させていくこともまた自分たちに課せられた使命なのではないかと考えています。貴重な機会を与えてくださった大町市のみなさまに感謝申し上げます。

小林ゼミ生一同



◆ 2012年度

李知映、伊藤淑子、大西美緒、岡村万理絵、菅野幸子、志田康宏、杉本華織、竹内唯、土本一貴、土屋正臣、長嶋由紀子、中村美帆、西菜津子、春谷美帆、廣瀬鮎美、マルコス・ペルシチ、ボルジギン・シナ、三谷八寿子

◆ 2013年度

石田さくや、李知映、岡村万理絵、金子智哉、榎谷夏帆、志田康宏、高田あゆみ、長嶋由紀子、中村美帆、西菜津子、春谷美帆、マルコス・ペルシチ、ボルジギン・シナ、松本郁子、山本翔吾

◆ 2014年度

石田さくや、李知映、岡村万理絵、小倉由佳子、笠原真理子、金子智哉、木村昌博、強谷幸平、高田あゆみ、高橋伸佳、陳艾文、中村太一、西菜津子、潘夢斐、マルコス・ペルシチ、ボルジギン・シナ、松本郁子、水田詩絵里、渡部春佳



資料編

大町市とは？

〔基本情報〕

◆市制施行：1954年7月1日

2006年1月1日には旧美麻村・旧八坂村と合併

◆位置（観点 大町市役所）

東経：137° 51' 3" 北緯：36° 30' 10" 海拔：726 m

長野県の北西部、松本平の北に位置する大町市は、「北アルプス一番街」といわれるように、その西部一帯に峻険な北アルプス山岳を連ねる。

◆面積：564.99km²

◆人口：29,208人（男：14,161人 女：15,047人）

世帯数：11,789世帯

人口密度（人口/世帯数）：2.47人

※平成27（2015）年1月1日現在

外国人登録者数：462人

（最も多いのは中国人の120人。続いて韓国人の84人、フィリピン人の81人）

※平成24（2012）年6月30日現在

◆文化施設

文化会館、図書館、山岳博物館、大町エネルギー博物館、ギャラリー・いーずら、蔵の音楽館、民俗資料館、文化財センター、公民館（6館）、公民館分室、四季演劇資料館、酒の博物館、西丸震哉記念館、塩の道ちょうじや（旧塩の道博物館）・流騎馬会館、長野県山岳総合センター、アルプス搗精工場



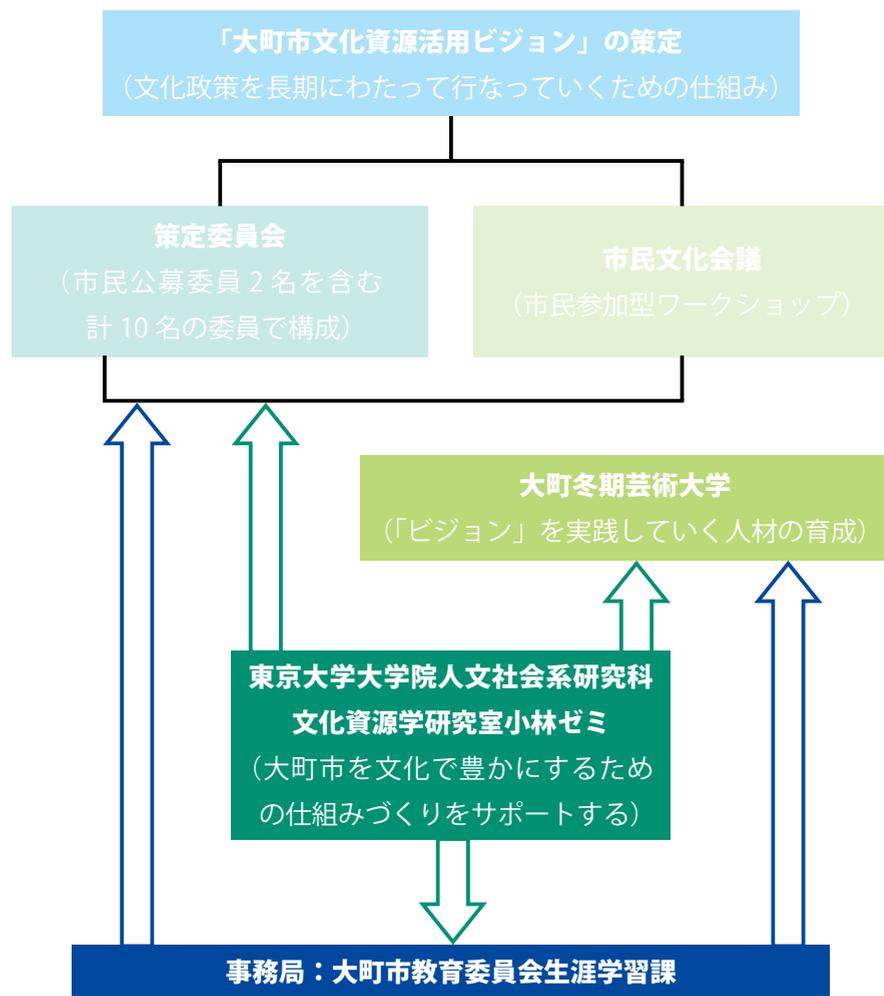
長野県

◆ゆるキャラ



おおまびよん

組織関係図



広報誌「ばもす！おおまち 大町冬期芸術大学ニュース」

◆特別号

発行日 2014年12月1日

配布方法 大町冬期芸術大学受講生に郵送

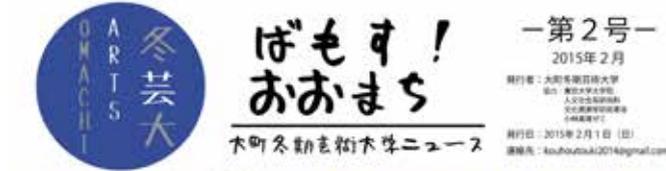
発行部数 約60部



◆ 2015年2月号

発行日 2015年2月1日

配布方法 各戸回覧



大町冬期芸術大学 第1期生 成果発表パフォーマンス Yes, I'm dapping! を開催します!

日時: 2015年2月22日 (日) 受付開始: 開演: 午後5時 - 開演: 午後6時 場所: 宇山公民館 (大町市宇山1032-1) 入場無料 (要予約) 予約: お問い合わせ: 大町教育委員会生活学習課

○English○ The 1st Performance of the Omachi Winter University of the Arts Date: Sunday, February 22nd, At 6pm Place: Taira Kōminkan Free Admission (Reservation Required)

○한국어○ 오오마치동계예술대학 제1회 성과발표회 날짜: 2015년2월22일 (일) 오후 6시~ 장소: 다야라공민관 입장료: 무료

○Português○ 1º Mostra dos trabalhos do Curso de Artes da Universidade de Inverno de Omachi Data: 22 de fevereiro - à partir das 18hs Local: Taira Kōminkan Entrada Franca

この事業は一般財団法人特別活動の平成26年度地域文化コーディネーター派遣モデル事業「芸術家養成」を活用しています。

大町冬期芸術大学では何が起きていたの?

大町冬期芸術大学の受講生は、来る2月22日に迎った第1回成果発表会に向けて、着々と準備を進めているところですが、2014年12月に行われた講座ではどのようなことが起きていたのでしょうか。ここでは、各コースの講座内容と受講生の声をご紹介します。

企画・プロデュースコースの紹介。第1回から第5回の日程と、受講生の声や制作の様子を写真と共に紹介しています。

パフォーマンスコースの紹介。第1回から第3回の日程と、ダンスや演技の練習の様子を写真と共に紹介しています。

空間芸術コースの紹介。第1回から第4回の日程と、空間デザインや装飾の制作の様子を写真と共に紹介しています。

ファッションコースの紹介。第1回から第3回の日程と、ファッションショーの準備や発表の様子を写真と共に紹介しています。

「市民」が「文化」の会議中! 市民文化会議も引き続き開催されています。文化資源活用ビジョンの策定に向け、まだまだ市民による熱い議論は続きます。

大町冬期芸術大学 第1期生 成果発表パフォーマンス Yes, I'm dapping! 開催日: 2015年2月22日 (日) 午後5時~7時 場所: 宇山公民館 (大町市宇山1032-1) 市民参加と協働のまちづくりフォーラム ~ずく出せ大町 みんなが主役~

文化資源活用ビジョン策定委員インタビュー 〇大町市長さん (市長就任時) 〇町長さん (町長就任時) 〇町長さん (町長就任時) 〇町長さん (町長就任時)

◆ 2015年3月号

発行日 2015年3月15日

配布方法 各戸回覧



新聞掲載

◆大糸タイムス 2013年3月13日(水) 1面

記事名：大町市を魅力的に 若手職員と市民団体がフォーラム

◆松本平タウン情報 2014年11月15日(土) 1面

記事名：文化の担い手地元から 「大町冬期芸術大学」開講 芸術家講師に舞台創作

◆中日新聞 2014年11月23日(日) 21面

記事名：文化のまちめざし冬期芸術大が開講

◆大糸タイムス 2014年11月23日(日) 1面

記事名：文化発展の人材育てる 大町冬期芸術大学が初開講

◆大糸タイムス 2014年11月23日(日) 1面

記事名：芸術文化資源活用目指す ビジョン策定に委員会発足

◆松本平タウン情報 2014年12月23日(火) 1面

記事名：若者たちよ立ち上がれ 若手の市職員有志が大町の将来を考える“100人会議” 市消滅の可能性も…今こそ声上げ行動を

◆大糸タイムス 2015年2月27日(金) 8面

記事名：「脱皮」テーマに殻破る

◆大糸タイムス 2015年2月27日(金) コラム欄

記事名：成果発表テーマの共有ならず

◆大糸タイムス 2015年3月1日(日) コラム欄

記事名：今の自分の殻から「脱皮」



参考文献リスト

◆文化行政・文化政策・まちづくり

- ・『アーツ・マネージメント概論 三訂版』、伊藤裕夫、片山泰輔、小林真理、中川幾郎、山崎稔恵著、水曜社、2009.4
- ・『観光まちづくり：まち自慢からはじまる地域マネジメント』、西村幸夫編著、学芸出版社、2009.2
- ・『行政改革と文化創造のイニシアティブ：新しい共創の模索』、小林真理編、美学出版、2013.12
- ・『芸術文化行政と地域社会：レジデントシアターへのデザイン』、衛紀生著、テアトロ、1997.3
- ・『実践自治体行政学 自治体基本条例・総合計画・行政改革・行政評価』、金井利之著、第一法規、2010年
- ・『指定管理者制度—文化的公共性を支えるのは誰か』、小林真理編著、時事通信社、2006.6
- ・『市民文化と文化行政』、森啓編著、学陽書房、1988.6.
- ・『新市民時代の文化行政：文化・自治体・芸術・論』、中川幾郎著、公人の友社、1995.7
- ・『地域創造』、財団法人地域創造、創刊号～Vol:35
- ・『都市デザインと空間演出』、国吉直行編著、学陽書房、1989.2.
- ・『21世紀の文化行政：地域史料の保存と活用』、地方史研究協議会編、名著出版、2001.10
- ・『日本の文化政策：「文化政策学」の構築に向けて』、根木昭著、勁草書房、2001.1
- ・『発展する地域 衰退する地域 地域が自立するための経済学』、ジェイン・ジェイコブズ著、中村達也訳、筑摩書房、2012.11

- ・『文化政策学』、後藤和子編、有斐閣、2001.8
- ・『文化行政—行政の自己革新—』、森啓・松下圭一著、学陽書房、1981
- ・『文化行政とまちづくり』、田村明、森啓編、時事通信社、1983.3
- ・『文化行政の現状と課題：21世紀に向けた芸術文化の振興と文化財の保護』、総務庁行政監察局編、大蔵省印刷局、1996.1
- ・『文化政策の展開：アーツ・マネージメントと創造都市』、野田邦弘著、学芸出版社、2014.4
- ・『文化ホールがまちをつくる』、森啓編著、学陽書房、1991.8
- ・『まちの見方・調べ方：地域づくりのための調査法入門』、西村幸夫、野澤康編、朝倉出版、2010.10

◆社会教育

- ・『社会教育の終焉』、松下圭一著、筑摩書房、1986.8
- ・『移りゆく「教養」』、苅部直著、NTT出版、2007.10
- ・『近代日本社会教育史の研究』、宮坂広作著、法政大学出版社、1968.3

◆広報

- ・『平成24年度研究会「自治体広報のあり方研究会」報告書』公益財団法人大阪府市町村振興協会、おおさか市町村職員研修研究センター、2013
- ・『都市自治体の広報分野における課題と専門性——478市区のアンケート調査結果を通じて——（日本都市センターブックレット No. 32）』公益財団法人日本都市センター、2013

ばもす！おおまち ー地域文化コーディネーター派遣モデル事業報告書ー

◆発行日

2015年3月15日

◆発行者

長野県大町市教育委員会

◆監修

小林真理

◆執筆

東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室 小林真理ゼミナール

李知映、ホルジギン・シナ、渡部春佳、ベルシチ・マルコス、石田さくや、金子智哉、高田あゆみ、松本郁子、小倉由佳子、笠原真理子、強谷幸平、高橋伸佳、陳艾文、中村太一、水田詩絵里

◆編集チーフ

松本郁子

◆デザインチーフ

高田あゆみ

◆印刷・製本

奥村印刷

